

土陽叢書

71

329

寺石 正路君 著

# 土佐古跡巡遊錄

高知書肆

開成舍發兌

卷 上

026114-000-8

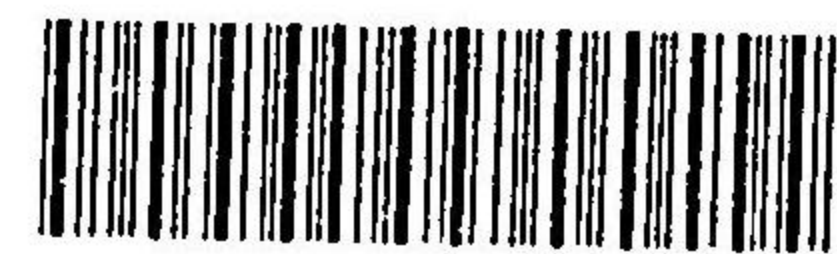
71-329

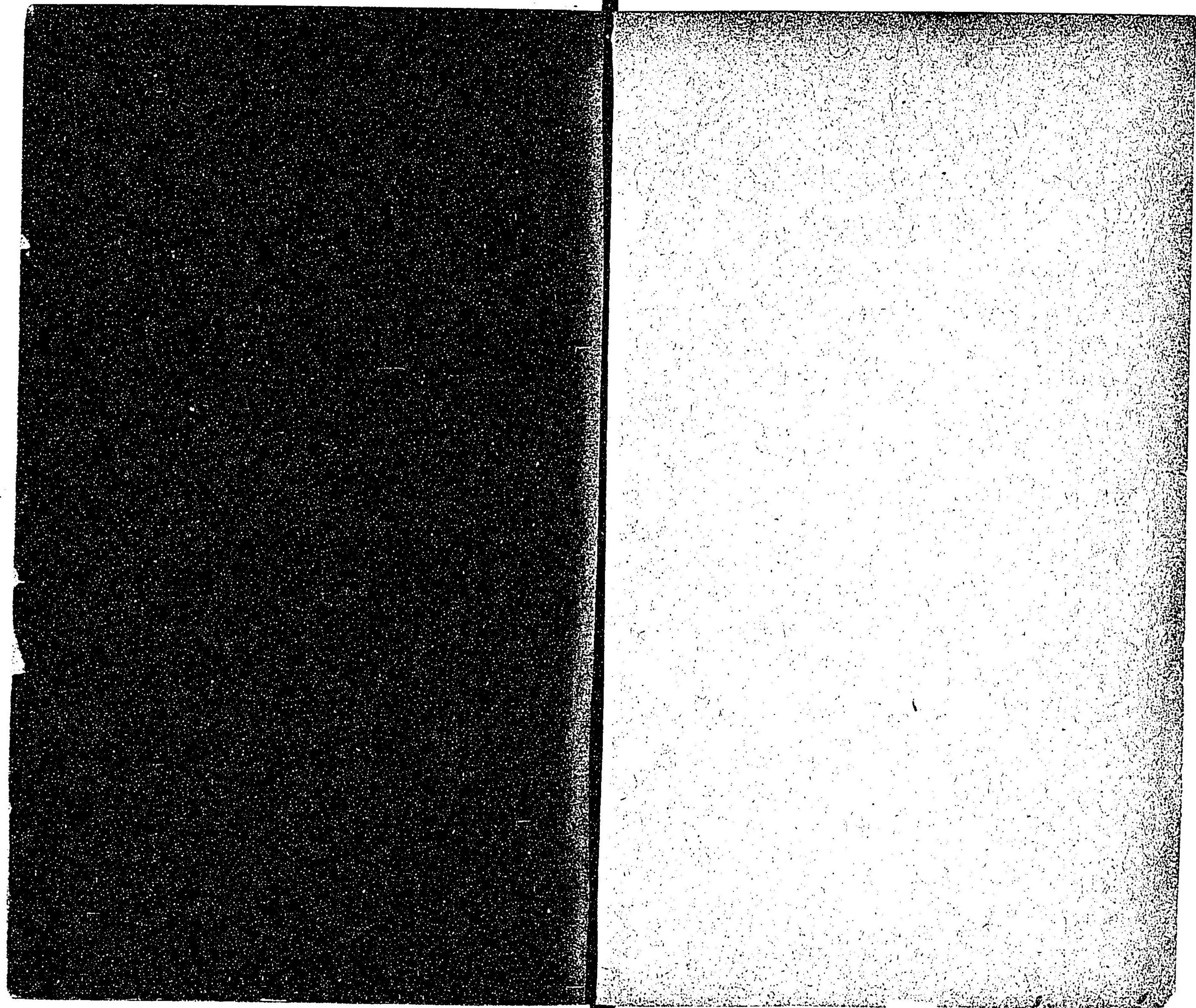
土佐古跡巡遊錄 上

寺石 正路/著

M31

ADC-3772









其付贅たり其蛇足たるを問はせ悉く收拾して記載して洩らさ  
ちぞ此の如き數年逐々褒然として積みて若干の冊子をあす其  
一遊毎の一記を得へ隨ふて集まり隨ふて加はるの様は譬へば  
豐太閤が金瓢馬表の一勝毎に一瓢を加へ逐々千成瓢箪をかせ  
しが如きも亦一笑するに足るべし呵々要するに皆一時の即興  
の本づくも雖も亦吾輩半生歴史の痕なり

頃る開成舎主人土陽叢書出版の舉あり頻りに余に需むるに其  
稿本を以てす余因て其平素遊記文中土佐國に關する者若干を  
抽て之に付與す材料の蕪雜にして文体の一からざる厭ふべし  
と雖も素より時々境遇の異なるの致す所洵に已むを得ざとあ  
る然りと雖も讀者の紀行文に取る所の者は彼の古人の名所圖

畫的の淺俚考証を根據とし無益なる彫飾の文字を列べ俗眼を  
眩耀せしめんとする時流賣文的の書ああらで却て事は其實際  
を尙び地は其實境を描き彼の民風土俗より山勢地形の委曲に  
至るまで眞を寫して洩さざる實際觀察的の書ああらん是れ余  
が著の組率以て其目的の千萬一に當るに足らざと雖も精神の  
注ぐ所却て讀者の同感を得んと欲し材料の蕪雜なる之を整頓  
せむ文体の一ならざる之を彫飾せむ狂げて生硬多疵の儘之を  
印刷に付與する所以あり讀者之を諒せよ

本書中挿む所の圖は皆上村昌訓氏の筆にあらる氏の妙筆我著を  
重ならしむ大かり茲に記して謝意を表す但し其圖を氏の手  
出づるも原畫は盡く余が實地寫景の圖にして上村氏の手巧少

しゆ其位置形勢一樹一石を變せぬ寫し出たる者かれを圖形  
乃意匠に至りては余は本文と同一の責任を有することを告白  
せざるへがらむ

明治三十一年三月

著者 寺石 正路

讀 未 曾 見 之 書 歷 未  
曾 至 異 山 水 如 獲 至  
寶 嘗 賞 味 一 段 奇 快  
難 以 語 人



幡多記行

寺石君著ス所幡多記行一篇聞雅迥勁ノ筆墨ヲ以テ秀靈清冷ノ山水ヲ寫シ間ウルニ古蹟傳記ヲ以テ蓋其行タルヤ本ト歴史上ノ考究ニ係ルト雖餘力ノ及フ所此ニ至ル豈稱揚贊歎セサル可シヤ余素勝具ニ乏シ西逝ノ如キハ只中村ニ至テ止ム今此編ヲ示サル、ニ及テ魂馳神飛ニ堪ヘス然モ齡旣ニ老境ニ入ル復タ謝履ヲ企ツルニ意ナシ今此編ニ依テ其勝概ヲ領略スルヲ得タリ其惠大ナリト謂フヘシ乃意會スル毎ニ寛エス數語ヲ掲ケテ鄙見ヲ述フ亦只寵脫ヲ謝スルノ意ニ外ナラサルノミ

明治辛卯重陽

茨木定興識

本文卷末ニ置ク處今便宜卷首ニ置ク著者並讀者之ヲ諒セヨ

開成舍主人敬白

川上ノ船



幡多郡渡川上リ船

幡多郡下田



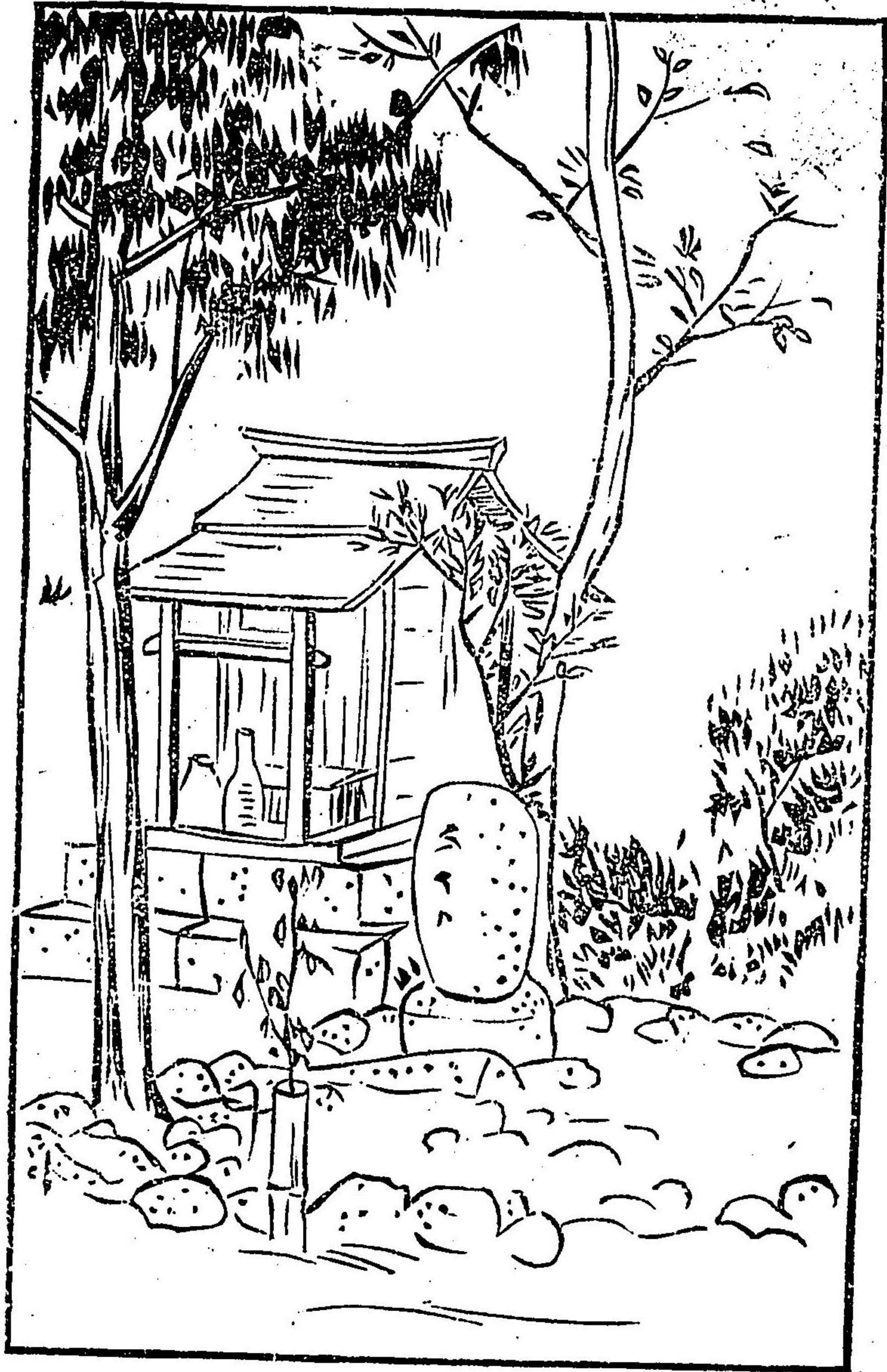


一 條 公 之 墓



播磨郡平田村  
一條公墓

播 磨 郡 平 田 村



土陽叢書 第七編 土佐古跡巡遊錄上卷目次

◎幡多郡紀行

○發程	一頁
○和歌の浦丸	二頁
○須崎港	二頁
○山崎氏紀念碑	三頁
○下田上り船	三頁
○中村に到着	四頁
○中村市街	五頁
○中筋川	全頁
○中筋街道	七頁
○宿毛	八頁
○松尾阪	九頁
○土豫兩國の境界	十頁
○貝塚の發掘	十一頁
○豫州途上	十二頁
○歎自在寺	十三頁
○僧都川の夜景	十四頁
	十五頁

○豫州歸途	十五頁
○貝塚二ヶ所の發掘	十六頁
○舊東福寺	十七頁
○伊賀氏並野中氏の墳墓	十八頁
○妙榮寺	廿一頁
○一條諸公郷の墓	全
○山田村の貝殻	廿二頁
○有岡驛	廿三頁
○中筋歸途	廿三頁
○中村の下り船	廿三頁
○汽船海上	廿四頁
○浦戸入港並歸宅	廿五頁
○木履の旅	廿五頁
◎冒暑錄	一頁
○鏡水橋	一頁
○鎌田堰	二頁
○耶曾渡場	二頁
○仁淀川	三頁
○八田關	三頁

○船 戸	四頁
○高岡市街	四頁
○蓮池古城	五頁
○踏切橋	七頁
○出間村中食	八頁
○岩 戸	全
○戸波川	九頁
○太郎丸村	全
○惠良沼ノ古跡	全
○家 俊	全
○市野々驛	十頁
○名古屋坂	十頁
○中平元忠墓	全
○鴨神社	十一頁
○八百比丘尼傳説	十四頁
○鴨社石塔	十五頁
○新 道	十六頁
○須崎浦	十七頁
○市 街	十八頁

○津野神社	全
○須崎入海	十九頁
○押岡渡船	二十頁
○押岡谷	全
○鳥 阪	廿一頁
○中浦渡船	全
○船 越	全
○鳴無官	廿二頁
○祭 禮	全
○横波三里	廿五頁
○福 島	廿五頁
○福島渡揚	廿六頁
○龍 坂	全
○青龍寺	廿八頁
○不動宮	全
○七葉池	廿九頁
○福島一泊	全
○宇佐坂	全
○新居渡	三十頁

○弘岡途上 ..... 全

○荒倉山 ..... 全

○歸家 ..... 全

◎**斐生嶺山紀行**

○緒言 ..... 一

○山田市街 ..... 全

○楠目渡場 ..... 全

○三條の堰 ..... 二

○鏡岩並鏡の地名 ..... 三

○斐生郷 ..... 四

○橋川野 ..... 五

○太郎丸 ..... 六

○野尻 ..... 六

○川上大社 ..... 七

○小川吉野 ..... 七

○根須並白石 ..... 七

○臼木坂 ..... 八

○降路 ..... 八

○大枅橋 ..... 九

○蔓橋並利葛乳兒 ..... 十一

○大枅町 ..... 十三

○夜景 ..... 十四

○嶺山郷 ..... 全

○斐生嶺山の平氏 ..... 十五

○小松神社 ..... 十八

○鹽峯神社 ..... 二十

○仙頭村 ..... 廿一

○押谷蔓橋 ..... 全

○歸程 ..... 廿二

○大枅再泊 ..... 全

○物部川の下船 ..... 廿三

○物部川下流 ..... 廿五

○舟行時間 ..... 全

○夜行 ..... 廿六

○大津川 ..... 全

○歸宅 ..... 全

上卷目次終

土陽叢書  
第七編

# 土佐古跡巡遊錄 上

幡多郡紀行

茨木定興評  
寺石正路著

發程

明治廿四年八月幡多郡に遊び遂に伊豫國宇和郡を巡遊して諸所の古跡を探らんとす會學友上村昌訓氏洋書寫景の爲め龍申お赴くの企あり因て同行相偕に宿毛まで赴くの約をなす全三日午前六時を以て汽船和哥浦九浦戸港出帆の報あり乃ち共に結束發程の準備をなす偶前一日の夜より暴風暴起し大雨傾注盆を覆へすか如く浦門の在瀨山立航す可からず汽船出帆延て三日となる次日風益暴れ雨益急に海上瀧聲々吼鳴猶ほ已ます汽船出帆又延びて四日となる余等已に風雨の爲め阻行二日草廬に偃臥し終日煩悶遣るに由なく殆ど日長如三小年の思あり四日天色始めて穩に雨晴れ雲散し汽船出帆トす可し上村氏と全行菜園場町より短艇に乘し之に赴く孕門五臺の諸山模糊として曉煙朝靄の中に隱見し翠色淋漓瀟らんとす八時にして

積健一時  
ニ散シ看  
ルトトシ  
快適ナラ  
サルナシ

旅中此時ア  
境ヲ免レテ  
穴ニ入ラズ  
サレバ虎  
子ヲ得テ  
ル者以テ  
后日ノ適  
ヘシトス

和歌浦丸に達す

和歌浦丸

此口汽船の乗客無慮數十人船室に填塞して殆ど立錐の地なし座する者あり臥す者あり柱を憑りて眠る者あり臂を交へて語る者あり雜沓喧嘩名状を可からず余等又通常切符を購て之に乗し頗る厭ふ可きを覺ゆと雖亦如可ともすへからず九時船遂に浦門を發す海上風猶ほ暴し怒濤洶湧し船体の搖撼殊に甚し乗客悄然相枕籍して眠る艀給の聲波聲と和して滿船轟然たり船龍冲を過る頃波濤奔跳船益々撼き掀舞簸蕩一葉片も管ならず正午十二時須崎港に入る尙風暴く浪惡きを以て遂に錨を投じ一泊に決せり

須崎

余は乃ち上村氏と上陸し青木の辻野見屋に投宿す抑須崎の地勢たるや高岡郡の南端に在り前は香渺たる滄海を面し後は重疊たる連山を負ひ左右の兩岬斗出して鵬翼を舒ばすが如く宛然彎月狀の海を畫き灣内水深く大船を泊す可し是を以て汽船商船の出入日夜絶えず帆檣林立百貨輻輳亦南海九十九灘中の第一の良港たり此日

一編ノ淡

製紙輸出  
店ハ是レ  
三浦氏ナ  
ルヲ知

一傳ニ就  
テ忽チシ  
論ヲ發シ  
識者ナシ  
テ亦能ハ  
サシム

朝來天氣變幻陰晴定まらず溽暑蒸すか如く殊に苦悶に堪えざりしが午后二時比より細雨肅々として降り淡煙縹緲海上來往の帆影皆有無の中へ入る午后三時雨歇む上村氏と全行市中を散歩す酒家魚店櫛比相連なる皆陋穢見るに足らず唯た製紙輸出店の稍宏壯を認むるのみ

山崎氏紀念碑

海濱八幡宮の旁山崎百太郎氏の紀念碑あり明治十九年英船(ノルマントン)号紀海沈没の時溺死せる人ありと云ふ石を築いて圓形の壇を造り中央自然石の石碑を建て周圍鐵欄を達らす結構莊重大嶋岬招魂社の南海忠烈碑に似たり銘文と村人某の撰なりといふ之を讀むに氏は平生の言行未だ常人に異ならず而して一旦非命の死を遂げ四方君子の憐恤およりて此盛舉お逢ふとを得たるものなり嗚呼人生れて茲世に在る五十年生きて事なく死して聞ゆるなきもの滔々皆是なり是を以て有爲の士と慨然志を立て發憤以て事を成さんとを勉む故に大聖孔子も終年遑々席爲に温あらず且つ君子と世を没して名の稱せられざらんことを惡むの嘆あり今山崎氏避く可からざるの危難お際し免る可からざるの命數お所し一死名を後昆に垂る其れも

造物者此  
活劇ヲ演  
シテ遊子  
ヲシテ無  
事ヲ苦マ  
シメズ絶  
奇々々々

亦不幸中幸なるもの歟而して世の有爲の士志成らずして死し名墮滅して傳らざる者の如きは是れ眞に哀む可き哉

#### 瀛船出帆

五日午前六時船須崎港を發す船体揺蕩昨日より甚し十時漸く幡多下田港に達す余昨朝以來船を病む此に至て眼暈し心悶し嘔吐する事數回神氣困憊殆ど斃れんとす漸くにして船を下て上陸す

#### 下田の上り船

暫くして上村氏周旋一舟を備ひ全行二三人を募り下田川を溯て中村に赴く前數日の暴雨を以て水量殊お増し黃流汎濫珊瑚の色をなし奔勢滔々駿馬の羈を脱する如し舟人二人一は陸に上て繩を牽き一は舟に在て棹を操る或は堤絶ゆる岸飲くるに至れば二人齊く舟に上り一と擢を揺ぐし一は楫を擔し前後邪許相和して行く十二時の頃驟雨瀉然江水を傾々來り雷電閃激天地爲染み色を改む舟殆ど覆らんとす暫

くして斜風細雨交々窓を掠めて濁水時に船腹を撲つ其聲澎湃たり一行蓬底に坐す雨滴滲透衣袂尽く沾ふ乃ち蝙蝠傘を四面に張り以て帳帷に代ふるも亦一時の輜畧なり昔し頼山陽筑後川舟中霰雪の急に降るに逢ひ蓬を架するに違わらず之を頭に戴き猶ほ酒を飲み已まざりし談あり殆ど全一の興會と謂ふへし亦之を以て彼の居れば則ち高臺大厦に坐し出れば則ち輕車肥馬に駕するの都人士お語り難きものあり田舎書生の行樂も亦風流ある哉

#### 中村に到着

午後二時船漸く中村後川に着す大雨を冒して上陸市街に入り天神橋通り大江惟英氏方に至て投宿す余二日の間已に斷食し空腹拐腸殆ど耐ゆ可からず是に至て始て一飯を喫す亦是れ淮陰漂母の餐劉公滹沱の飯快味更に幾倍を知らず四時雨晴る郡長大西正義氏を訪ふ

#### 中村市街

中村は幡多郡四万十川の河畔にありて昔は人口稠密土佐國第二の都會と稱す今其由來を尋ぬるお彼の足利氏の末年應仁亂後より天下麻の如く亂れ群雄蜂起し輦轂

數百年間  
歴史約  
而能遊  
所不能  
煩者言

の下は變して兵燹修羅の巷となり月卿雲客四方に流離し或は莊園に潛み或は名族に依る此時方て攝家一條氏の采地我土左國幡多郡にありしも武人横領して名ありて實なし關白兼良卿深く之を慨し子孫をして興復の志を繼かしむ已おして土左の國亦守護代細川氏の權方地に墜ちて所謂本山、安喜、大平、津野、山田、吉良長宗我部の七人衆國中へ僞起し互ふ勢を角し雄を爭ふ後七人衆相議して曰く我輩互に戰鬪掠奪滅びざれば已ます是れ敵に糧を借し盜を與ふるものなり如かず京師の名望一條公を迎へて相戴て國司とし兄弟鬪鬪の争をやめ外敵乘寡の侮を禦がんにはと時に文明十二年兼良卿奈良に隱居し息關白左大臣從一位教房卿兵庫に居る長曾我部等乃ち之を迎ふ教房卿即ち文明十年を以て土左岡豊城に下向す明年幡多中村城に移る是より以後數世權大納言正二位房家卿、左中將正二位房冬卿、權中納言中將從三位房基卿、權中納言從四位兼定卿、左中將內政卿、世々相繼き一万六千貫を領して國中を支配す中村市街の起るは實に此に始まる今當時の古圖を見るに市街の規模京師に擬し一條公の邸を御所と稱し其門を日の御門と稱す西に公卿屋敷あり東に與力並北面侍屋敷あり北に家老諸大夫の屋敷あり其他諸國使

者邸京師使者邸御殿御幸場蹴鞠場調馬場等の配置一々枚擧す可からず戰國亂離の余文耐地を掃ふ而して一條氏獨海南に於て屹然持立禮樂を講し朝聘を納る以て其門閥の盛なるを知る可し但だ晚年長曾我部氏跋扈し兼定內政の二卿相繼て敗れ土左一條家乃ち亡ぶ慶長五年山内氏入國以後康豊公中村城を領す公歿して後幾くもなく城亦廢す爾來中村は西郡の治所とあり繁華衰へず近來王政維新の後官廳を撤し士民業を失ひ人口漸く減す今と則ち昨年の大水家屋を浸蝕して檐破れ壁崩れ街市荒涼鷄犬の聲肅然として滿目慘愴なる戰後兵燹の迹を見るか如し不覺黯然又愴然たり

## 中筋川

五日雨晴る午前七時朝餐を喫了るや早發中村を出で陸行宿毛へ赴かんとす而も連日霖雨の後炎暑益加はり酷熱耐ゆ可からず遂に小筑紫の人佐竹氏を語らひ三人一舟を備ひ又中筋川を溯る中村み出で數町の間大河を下る濁水奔逸勢ひ萬馬よりも急なり左右を望めば群山万岳蜿蜒起伏嵐嶺浮翠人の衣袂を照す暫時にして舟行一轉し中流を横きりて中筋川へ入る川幅十余間碧流汗漫として水勢始て緩めり會



忽チ華府  
ヲ樂郷ニ  
入ル賜ニ  
非陽ノ賜ニ

炎、日、天、に、中、し、暑、氣、熾、く、か、如、し、舟、子、船、を、岸、邊、に、寄、せ、斧、を、提、げ、て、竹、林、に、入、り、竹、竿、數、本、  
を、斫、り、取、り、之、を、交、叉、し、て、介、字、形、の、仮、庇、を、作、り、蓬、二、枚、其、上、に、掩、を、ふ、て、小、屋、を、な、す、余、  
等、行、李、を、枕、と、し、て、其、下、に、横、臥、す、櫂、聲、叩、嗚、時、に、夢、を、破、る、首、を、延、へ、て、岸、上、を、望、め、ば、楊、  
柳、青、々、長、堤、に、繁、茂、し、田、畦、万、頃、綠、秧、微、風、に、戰、ひ、て、習、々、聲、あり、其、光、景、宛、も、淀、川、三、十、石、  
の、上、り、船、に、似、た、り、

### 中筋街道

午、后、三、時、の、頃、舟、漸、く、有、岡、村、に、達、す、三、人、上、陸、一、旅、店、に、入、り、小、憩、す、店、之、新、築、に、し、て、北、  
に、翠、巒、を、負、ひ、南、は、青、田、を、望、み、眼、界、濶、然、涼、風、颯、と、し、て、欄、干、の、下、よ、り、生、す、極、め、て、快、適、  
な、り、已、に、し、て、下、婢、晝、餐、の、成、る、を、告、ぐ、黃、梁、の、飯、饅、饅、の、灸、乘、皆、舌、を、鳴、ら、し、て、健、啖、飽、く、  
を、知、ら、ず、三、時、半、有、岡、を、發、し、山、腹、田、勝、の、間、を、徑、し、行、事、二、十、町、余、山、田、村、に、至、り、上、村、氏、  
と、全、行、大、江、吉、美、氏、を、訪、ふ、始、め、中、村、を、出、る、時、大、江、維、英、氏、よ、り、山、田、村、近、旁、貝、殻、の、出、る、  
土、地、あ、る、を、聞、き、其、有、無、を、問、ふ、氏、答、へ、て、曰、く、君、の、歸、日、ま、で、に、其、搜、索、を、な、さ、ん、と、因、て、  
全、家、を、辭、し、て、又、途、お、上、る、中、筋、川、の、上、流、灣、曲、斗、折、道、路、お、隨、ふ、て、紆、餘、す、或、は、激、流、雪、を、  
吐、き、或、は、深、潭、藍、を、蘸、す、亦、奇、景、な、り、平、田、村、に、至、り、道、旁、茶、店、に、休、憩、し、晚、六、時、に、及、ひ、て、

教育ノ國  
家ニ益ヲ  
ルヤ之ヲ  
十數年ノ  
後ニ期セ  
サル可カ  
ラサルヤ  
此ノ如シ  
世ノ憂國  
者當ニ三  
所ナヘキ

遂に宿毛町に達す有岡より此に至るまで行程三里と云ふ上村氏は親族某方に赴き  
余は又佐竹氏と別れ獨り本町東屋に投宿せり

### 宿毛

宿毛と土左國極西の都會にして古へ山内家の家老安東氏の領地たり安東氏今伊賀  
氏と稱す人口數百戸街市三四條をなし規模狹小と雖も結構清潔佐川須崎お亞ぎて  
城西第三の繁華たり此地此の如き掌大の地と雖も王政維新以來人物輩出し現今朝  
野樞要の地位を占る者少からず就中官吏にして岩村通俊氏全高俊氏二人衆議院議  
員おして林有造氏大江卓氏竹内綱氏の三人故改進黨員にして小野梓氏の如き其翹  
楚ある者なり其他一事一藝名を揚げ家を興こすもの枚舉に堪えず蓋し宿毛の物産  
は珊瑚樹にあらす松魚節にあらす秀才の人物に在り嘗聞く山水清淑の氣は能く偉  
人を出すと余今其地形を観るに本城山は嵯峨天半に聳え松田川は澗激其麓を流れ  
風景爽絶已て海南秀靈の氣磅礴此處に鍾萃するを覺ゆ況んや之を父老に聞く安東  
氏の教育の道を勵ますや天保二年三宅大藏の願によりて講授館を開き尋て文久三  
年文館と改め慶應三年又日新館と改め子弟をして槍刀弓馬の餘讀書講學を研磨せ

極力危險ノ人ヲ寫スルニテ其地ヲ踐ムカク如クナラシム

しめ殊に其才幹氣力前途の望あるもの之資を給して他國に遊學せしめ務めて開進の手段を取り人才の教育に汲々たりしと云ふ其一旦風雲に際會して俊傑紛々雨の如く起り龍昇虎騰青雲を攀付するものあるは是れ豈に偶然ならんや

松尾坂

七日早起宿毛村を發して伊豫に向ふ田々の新秧蒼翠青鹽を敷くか如く朝風拂々海面より吹き來て殊に爽快を覺ゆ行くこと二十町余始めて山路に入る松林路を夾て鳴蟬聒々滿山皆聲あり乍ち降て又一山を攀づ此の如きと三四回小深大深の諸浦を経て遂に松尾坂に抵る坂路傾斜殆ど八九十度の角度をなし絶壁斷崖人を壓して墜んとす勇を鼓して攀づれば尖石亂又凹凸足を噛む一を避くれば一に觸れ顛倒進む可からず嘗て唐人の詩を讀むに蜀道之難難於上青天の句あり平生疑ふて詩人の大言とあす今日此山を過て始めて摸寫の虛ならざるを知るなり上ると數十町中腹不達すれば樹木禿して日光直射流汗滴々氣息殆ど絶えんとす松陰に就き休息すること少時清風肌を襲ふて漸く蘇生の思あり俯して望めば宿毛灣瑩然明鏡を開き島嶼點綴風景畫の如し而して海濱一帶の長堤蜿蜒直線を劃するものは林有造氏の

尋常人ヲシテ眼目ヲ恐クハ此カニ眞ニ是林氏知

新田、陂塘なり聞く氏數年前數万金を費して滄海を埋め此の新田を開き已にして一旦水災に罹り低地は尽く水に浸され復播種之功を奏するを得ず故に今陂塘水中に沈み宛も波除堤防の如し然も其新田の落成より舊來瀕海の汚田漸く海水に遠かり始めて豊腹の熱田と變せしと云ふ

土豫兩國の境界

絶巔に二茶店あり就て憩はんとす汚穢近く可からず酸鼻して過ぐ店を離るれば即ち國境あり二個の大石碑左右に屹立す一は曰く自是東土佐國と一は曰く自是西伊豫國宇和島藩と顧みて山下の海灣を望めは遠く煙水を銜む其土左に屬する處は高峯峻嶺重疊相連りて所々に岬灣を凹凸し遂に沖島の一島最南の岬端に浮湧するを認む因て憶ふ昔は正保明暦の頃我藩宇和島藩と互に該島の所領を争ふや議論葛藤愈結んで愈解けず遂に幕府に上訴して其裁判を請ふ是より先き兩國を界を定むるに古歌あり曰く

笹矢筈正木川分松尾坂藻津濱中あしはれりのり

宇和島の藩吏土居六之進末句を「汀おりのり」と讀替へ其封疆の廣さを主張す我藩

凡歴史學  
ヲ修ムル  
者識力ヲ  
具セサル  
可カラズ

十二  
の大夫野中兼山又舊記を徴し地理を按し百方撿覈其虚偽を辨し事遂に捷つを得たり乃ち松尾坂近傍の失地を回復し且つ沖島と從來無所屬の島嶼な<sup>●</sup>しも爾來折半兩國の分有となる近日廢藩置縣の後は地理管轄の便によつて全島擧つて我縣の版圖に入れり或は云ふ沖島は元來豫州領なりしも其近海漁魚の利大なれば兼山氏の鋭眼早くも其併領の利大あるを察し苦肉の謀計を施し之を取りたりと抑今日幡多西端所謂奥浦地方數十里の海上に在て珊瑚、龜貝、海藻、石花菜、より鰈、鯉、鱒、鯛、章魚、鳥賊の海産物採獲山の如く年々巨万の貨財を積殖し戸々潤澤人民安堵津とし浦として到る所擊環鼓腹の聲を聞かざるなきもの何ぞ當年兼山氏折衝斡旋の功に由らざるを知らんや我邦人たるもの千載の下其功德を記せずして可ならんや

豫州途上

松尾坂は南坂は極めて險峻なるも北坂は然らず其傾斜角度も大約四五十度となれり山嶺以西は即ち豫州南宇和郡にして連山綿亘波濤の湧起するか如く溪流委蛇其間に斗折す朝來嶮坂を昇降して具さに疲勞を極め且つ午熱赫々唇焦し口渴し僅かに一杯の飲を得んと欲するも復た一茶店なし九時漸く小山驛に至る人家稠密鶏犬

日險日熱  
ノ苦境ヲ  
經宜ナリ  
此胃潤ナ  
涼ノ快ヲ  
覺クヤ

の聲相聞も心之を樂み倉皇就て憩せんとす近きて之を見れば皆穉人の部落なり余性潔癖あり蟹盛鼻を掩ふて過ぐ十時一本松驛に達す市舎數軒始めて良民の家あり乃ち其雅潔なる者に就て一椀の清水を飲む胃潤ひ腸涼お頓に三伏の熱を忘る十一時山を下て平田に入る四方曠遠村落點々林樹の間に隱見し僧都川の清流一帶蜿蜒雷激し雪を噴して走る十二時城邊驛を過ぎ全三十分途に平城驛に達す碧瓦紛壁樓榭相接し市聲湧くか如く亦豫南の一都會あり一旅店に投して晝食す

貝塚の發掘

午后一時村役所へ至り村長中尾初太郎氏を訪ふ尋ぬるに貝塚の有無を以てす中尾氏答て曰く貝塚村は當驛の西一町に在り而も未だ嘗て貝殻の其地中より出るを聞かず唯だ當驛は其名無しと雖も却て貝殻の地層近く咫尺に在り余曰く是恐くは貝塚村の名當驛に發し今は他村へ移れるならんと中尾氏又曰く余が家圃は即ち一面貝殻の地層なり宜く掘て之を檢す可しと乃ち氏の農僕を雇ふて之を發掘す掘ると三尺余にして果して隘々たる貝殻一面に埋敷し繩紋土器、碎片、獸骨、獸齒、石器、碎片、等、等に隨ふて散亂す余一々點檢之を採集し其搜索の空しからざるを喜び猶

宿望頓ニ  
遂ケ其眉  
揚カリ氣  
仲フル間  
狀紙筆問

ニ躍々  
リ亦以  
平心潜  
史學ニ  
キルノ  
未發ノ  
チテ人  
シテ功  
ルセシ

八十八箇  
所吾四國  
人情風俗  
ノ關スル  
所此鋪叙  
ナカラス  
カラス可

は其地層土質地勢の高低海濱の距離等を測定し全四時に及び厚く氏に謝してりへ  
る抑貝塚は本邦石器時代の人民の遺迹にして其經過の年代は大畧二千乃至三千年  
前にして從來北海道を根拠とし漸次に南して漸次に稀に畿内以西は僅かに九州島  
に五六ヶ所の外中國四國地方には絶えて之れ無きものなりしか今日此平城驛に於  
て此の發見をなすに及んでは始めて四國島にも其痕迹の及びたるを確知す可く史  
前時代人種散布上の研究につき更に一種の好材料を増加せるものなり

觀自在寺

平城の市街之後お葱蔭たる翠巒を負ひ前は明媚なる清流に臨む其翠巒林欹げ山平  
なるところ堂閣閑相連り夕陽金碧嵐光と相映す之を歡自在寺と曰ふ四國八十八ヶ  
所の一にして四十番札所なり抑八十八ヶ所とは其昔し僧空海の開基にして四國島  
中山川靈淑の地八十八所を撰ひ之を佛像を安置し以て曠悍なる人心を調和して醇  
雅の風俗を馴致せる無量功德の遺迹なり是を以て毎年春時廻國の時節に際すれば  
善男善女三五隊をなし追摺を掛け念珠を手にし南無大師遍照金剛を唱へて巡禮行  
をなす蓋し四國特有の風俗とす寺畔旅店宿房櫛比相接す以て當日ノ繁盛なるを想

境已ニ清  
絶筆意亦

ふ可し但近來我郷土佐國の札所は大抵荒廢して寺殿の存在する所十が一二のみ而  
して豫州に來れば伽藍巖然香火絶るす亦以て兩國人情の異なるを見るに足る可し

僧都川の夜景

夕陽已に没し暝煙四合日中ノ殘炎猶ほ燦々か如くし旅店の室中に屏居する能はず  
出て僧都川の橋上に歩す一痕の新月鎌の如く遠樹の梢に掛り清光輝々水面に映し  
水聲沙に激して錚々然たり夜愈深くして風愈涼し万籟闕寂乾坤深沉として清絶爽  
絶人をして超然塵外の思あらしむ

豫州歸途

八日拂曉起て僧都川に漱く昨日途上一店の休息する所なく頗る困厄を極めしお懲  
り梨子數顆麵包一斤を購ひ之を肩にして行く九時にして松尾坂を攀ち十時絶巔に  
達す南海一望の景色轉た壯觀なり松陰岩上に踞して梨子麵包を喫し清風お嗚吸し  
て盤旋山を下る十一時宿毛村に達し貝塚部落を過ぐ初め余の幡郡に來る宿毛村に  
貝塚部落の地名あるを聞き其石器時代の遺迹なるやを檢せんとす會全行上村氏の  
親戚濱田三賢氏其部落に住し且其邸内貝殻の散布せるあるを聞く此に至て氏を訪

濱田氏曰く貝殻の出るは余か庭前一面と隣人中脇馬二氏の田圃一面なりと乃ち先づ庭上を搜索するに果てし獸齒土器碎片を得たり因て愈其平城貝塚と全しく石器時代の遺迹なるを確知し午下再訪を約し勿々宿毛市街入り再び東屋に投宿す

貝塚二ヶ所の發掘

午后一時使を馳せて上村氏を招く氏來る乃ち全行濱田氏邸内の貝塚を發掘せんとを勸む氏曰く今日は宿毛舊學校日新館の再興開業式ありて余も招待を受けたれば遺憾なりら全行を得すと余乃ち獨行を決し先づ共に村役所に至り村長森弘洲氏を訪ふ氏曰く過日郡長大西氏より君來遊の報知あり旅中の所要については万事便宜の周旋を余さんと余深く其厚意を謝し且つ本日一見せし宿毛村貝塚は愈石器時代の遺迹にめと學術上有益の故墟なれば一朝無益に壞破することなからんを希望すの意を述べ二時氏を辭し又上村氏に分れ獨り濱田氏に至り其庭前を發掘す掘ると二三尺貝殻一面を成し獸骨獸齒土器破片等紛亂其中に雜はる乃ち尽く之を收め三時濱田氏に従ひ中脇馬次氏を訪ひ其田圃を檢す廣袤七八畝ばかり貝殻地上に散布し偶然雪の如し余畦間を搜索し石鏃、石器破片、土器破片、若干を獲り因

此快樂ヲ得ル其志ノ厚キニ由ルシテ幸トシテ以テ天亦以テ其虚ニ足ヲ見ルニ

て濱田氏に歸り休憩少時五時全家を辭しかへる昨日豫州に在て已に一箇の貝塚を發見し其純然たる石器時代の遺迹たるを知り今日又我土左國に於て更に二處を發見す此行何の幸ぞ旬日の羈旅にして山水秀靈の氣を借て我襟懷を洗ひ特に續々貴重なる發見をみず蓋し一舉双得の快樂を獲る者と謂ふへし夜上村氏來訪縱談十時にしてかへる

舊東福寺

九日午前八時貝塚發掘古物を封函し内國通運會社に托して高知に送る九時上村氏を訪ふ十時上村氏同行石河光徳氏と共に故南泉山東福寺に至る今安樂寺と稱す舊領主伊賀氏の菩提所なり嘗て聞く當寺數代の祖に月海和尚緯之白明と云ふ者あり素と土左郡森郷の人なり元祿十五年十九歳おして江戸に遊學し高輪泉岳寺に寄食す其歳の十二月十五日の曉彼の名高き赤穂義士の復讐あり四十七人の浪士鮮血淋漓の儘泉岳寺に來り舊主淺野長短の墓前に回向焼香し遂に寺に入て休息す寺僧朝飯を饗す月海給仕の役を執り出て周施す木村岡右衛門其前に在り衆人皆右肩に金紙を掛けて姓名を書す獨り木村左肩に法名を掛く月海之を問ふ答て曰く播州懸溪

奇事叙得  
簡明猶親  
ク月海ノ  
談ヲ聞ク  
カ如シ

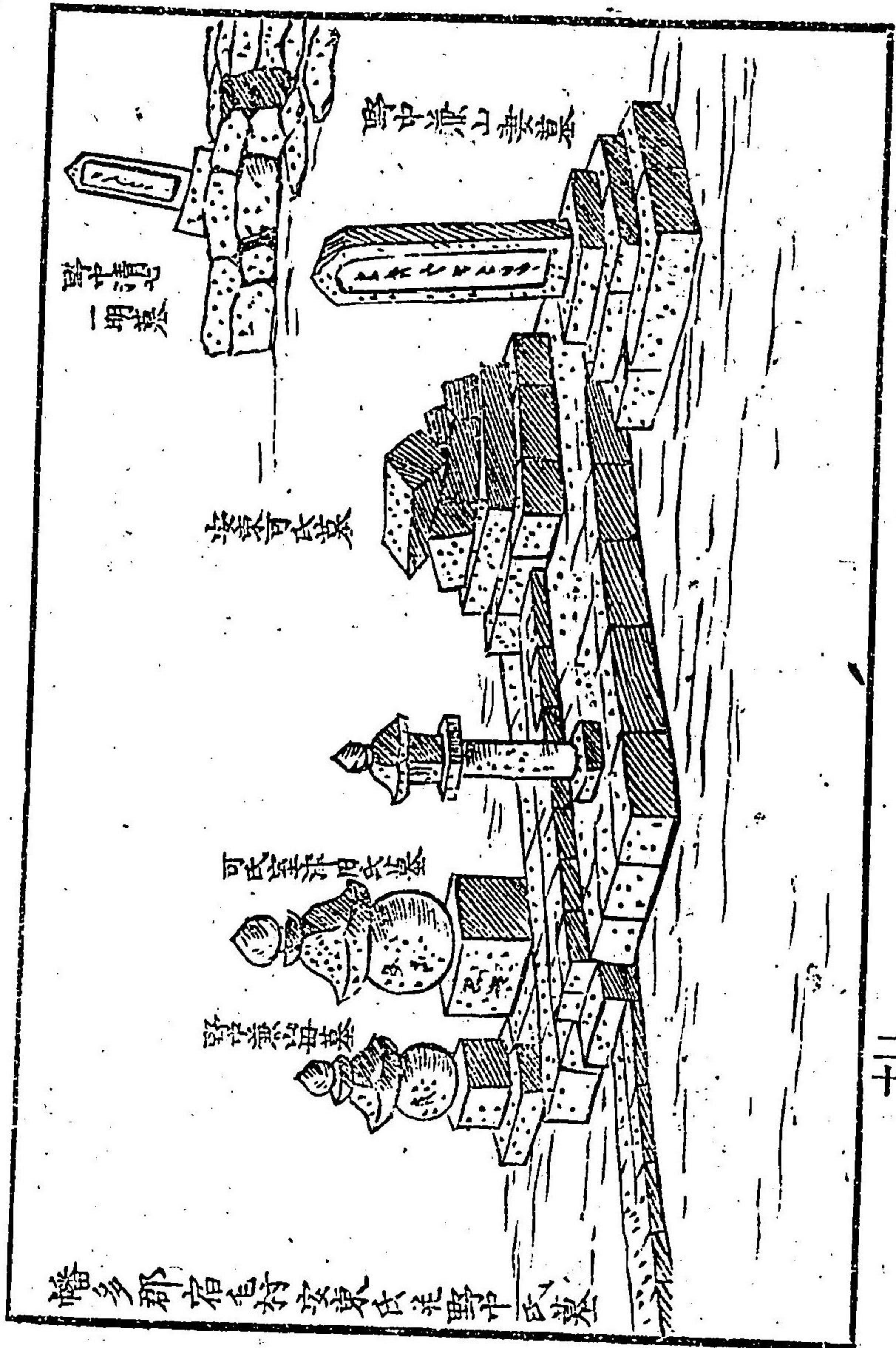
禪師の名くる所なりと月海以爲く蟠踞は有名の禪師なり木村之と交る必ず禪を修  
むるならん今死を期す豈偈なからんやと因て辭世の詞若くは今朝の即吟を書せん  
とを請ふ木村沉吟之を久ふし一首の和歌を書す指創の血滴々紙上お落つ將に改め  
書せんとす月海曰く是れ丈夫の遺魂なり何ぞ改め書す可けんやと乃ち強て之を請  
ふ次に茅野和助に向ひて請ひ和哥俳句各一首を得へ又岡野金右衛門大高源吾二人  
に囑して「其句ひ雪のあちらの野梅哉」山を裂く力も折れて松の雪の各辭世の句  
を得たり四人又月海お向ふて死後の回向を托す月海猶ほ他人の揮毫を請はんとす  
飯已に成り事乃ち巳む享保三年歸國の時其遺墨を携へ來り爾來相傳へて寺寶とな  
す余今日偶然此寺お遊ふ乃ち寺僧を叩いて一見を請はんとす石河氏曰く寺藏義士  
の遺墨は一時廢藩の頃より舊主伊賀氏の有に歸せりと尤遺憾となす

伊賀氏並野中氏の墳墓

舊東福寺の山上は即ち伊賀氏の墳墓なり石河氏の先導にて又之に登る高低大小の  
墓表累々相並ぶ大抵五輪の塔なり其中壇塋域窳も大なる處安東左衛門可氏夫妻の  
墓あり二箇の大塔にして高各五六尺義氏は美濃人一豊公の甥にして四方に従軍し

極力撰  
野中氏ノ  
爲ニ其宛  
ヲ仲フ誰  
カ之ヲ誰  
テ感泣セ  
ラサル者  
ヤ

て創業の功臣たり因て宿毛を賜はり大夫となる實に伊賀氏の祖先なり可氏の塔の  
右野中兼山夫人の墓あり碑石高五尺余中央に法名を彫す其左に野中兼山母堂の塔  
あり母堂之義氏の女と云ふ山上一壇に又兼山諸子の墳墓あり石を疊て席大の石廓  
を作る皆石塔おし唯前面左方お一碑あり野中清七一明墓と云ふ石河氏指して曰く  
其右方に在るものは貞四郎行繼の墓なり其後面に在るものは欽六明繼希四郎繼業  
の合墓なりと蓋し野中氏素と伊賀氏と親類たり是を以て其謫せらるや四百人扶持  
を以て御預けとされりと云ふ抑兼山氏不世出の才を以て英主の拔擢に逢ひ一時志  
を得て樞要の任に膺り新政を施こし國利を増し滿腹經濟の技倆施こして餘すなく  
其餘澤の百世に及ぶもの皆國人の感仰する所なり而して一朝讒者の嫉妬君主の聰  
を蔽ひ罪狀鍛鍊獄成て廢黜せられ何くもなく窮愁病て没す子孫何の罪かある其櫃  
肉未だ冷りらざるに又此宿毛の邊陲に謫せられ零丁孤苦死して且つ滅ぶ哀哉今日  
其墓上お來る拜展人なくして斷碑兀立し苔蘚之に蝕れて古色蒼然たり覺えず暗涙  
の墓前に濺く數行



妙榮寺

十時東福寺山を下て又妙榮寺に至り法雲院妙榮日通公の墓を見る藩祖一豊公の御姉安東可氏氏の母堂なり石壇方五尺高三尺中央に大浮圖を建て周圍に石欄を周らす碧苔綠蘇之を封し文字黯然見る可からず蓋三百年以上の石塔也

一條諸公卿の墓

十一時上村石河二氏と手を分ち一旅店に中食して宿毛を發す押の川村を過る時驟雨俄かに至り衣帽尽く沾ふ午后二時平田村に達し道旁茶店に小憩す乃ち店の主人に就て嚮導を求め一條公の墓を探らんとす主人周旋立ころ小學生徒二名を募り來る因て之に従ふて行く生徒各年十二三炎天笠を戴かず跣足おして往く健歩飛ぶか如し田舎兒の活發愛す可し田廬を徑し溪澗を渡り遂お一坂を踰も激湍峻嶺左映右帶し宛然山險の想あり二時半途お舊藤林寺に至る即ち一條公菩提寺あり寺は今廢せるも猶僧遺俗して舊庵に住するあり因て請ふて墓場に入る山腹を登る事三四間地少しく平かに樹木遮蔽前面に假柵小門を設く排して入れば南北相並て三箇の楕圓形小塔あり高各一二尺許り方石の上に置く右は房冬卿中は房家卿左は房基卿

皇澤ノ荒  
涼ノ問  
一ノサ  
魂ノ下  
安ズヘ  
況ヤ生  
昭代ノ  
ニ沐ス  
モ誰カ  
親ノ誰  
ル可シ  
ヤサ義

とす、柳杉の、小木、二三株、搭背に、簇生す、而して、樹、艸、前後に、叢生し、蟲聲、唧々、晝、尙ほ、黯澹  
たり、抑諸公、縉紳、攝華の、統を以て、遠く、登、穀の下を、離れ、風塵、零丁、此の、海南の、山中に、索  
居し、碧殿、朱門、錦衣、玉食の、身を、此、寒、凋、荒、草、獸蹄、鳥跡の、間、小、埋め、吊、祭、至らす、風雨、永く  
荒る、天、長く、地、久しく、恨み、何を以て、消せんや、然りと、雖も、今や、王業、中興、百度、維れ、革ま  
り、徽、聖、慈、仁なる、皇后、陛下は、諸胤、公の、尊を以て、万、乘の、玉位に、上り、往年、品川、彌、二郎、氏  
來國の、を、時、勅、命、下し、追、遠の、幣、帛を、進め、猶ほ、一、條、家、の、諸、連、技、談、合、社、殿、再、興の、企、あり  
と、聞く、是に、至て、諸公の、魂も、少しく、地下、小、安す、可き、なり、三時、小、學生、徒に、各、銀、貨、一、片  
を、興へて、之を、謝し、還し、余は、獨行、別、路を、取り、再、以、本、街、道に、出、でたり

山田村の具殼

四時に及ぶ頃山田村に達し大江吉美氏を訪ふ氏曰く前諾を追ひ具殼の出る所を捜  
索せしに果して松本彌吉と云へるもの邸内ふ之れあり行て一見す可しと乃ち氏の  
小兒を導として之ふ赴く松本氏の家は一堆の邱上に在り其邱腹断面地層疊成の中  
断殼の點々散布するを認む然も之を諦視するに沖積の地層に屬し素と自然海水の  
作用によりて堆集せるものにして復人迹介墟の痕なければ直に全家を辭して又故

入皆倦臥  
暑困ム公  
ハ則毎ニ  
玉壺清絶  
ノ境ヲ古  
ム乃知ル  
仙凡異郷  
ナラズ只  
其心ノ清  
濁如何ニ  
在ル

路に復せり

有岡驛

晚五時有岡驛に著す前途好驛亭を以て遂に一宿す乃ち前日中食せし處なり夜  
暑氣殊お甚し出て有岡川に沿て散歩す田々の玉蜀黍、甘蔗、煙草、芋、皆穰々成  
長して人頭より高し西風來て之に觸るれば葉聲漸瀝たり月光は水面お反映して更  
に清絶を添へ涼色掬す可し低徊吟賞更深きに及んで乃ち歸る

中筋歸途

十日蟻食有岡驛を發す或は邸陵起伏の間を穿ち或は田塍曠豁の際を横きり磯川、  
荒川、國見、楠島、具同の諸村を經へ三里にして四万十川に來る渡舟を呼ひ前岸  
お達す河水猶ほ濁色を帯ひ川幅平常に復せず又河源の遼遠おして水量停蓄の大を  
想ふ可し十時中村市街に達す漁船和歌浦丸今日午后四時下田港を發すと聞き之に  
乘して高知にかへらんとし回て市中を散歩して蕨粉干鮎を買ひ歸遺に充て京町和  
泉屋に投す

中村の下り船



概テノ收  
寫得テ  
ルカ如シ

旅途固  
爽アリ  
於テチ  
只此數  
所蓋ス  
所極テ  
以テ多  
篇ノ收  
ニ充ツ  
ヘ結

收録簡潔  
萬一竅收  
ス一竅ニ  
歸

木履ヲ  
スノテ  
錘餘ヲ  
録ニ寫

晝餐已に了る瀛船問屋の壯丁蒼皇來り報して曰く橋舟今正お中村を下らんとすと  
乃ち咄嗟行李を提げ之に乗す時已に二時なり前一週の大雨水勢猶は漲り舟行迅疾  
快奔馬の如し兩崖の青山舞ふか如く跳るか如く左に迎へ右に送り願眈應接暇あら  
す殆ど李白の詩云へる兩岸猴聲鳴不止輕舟已過万重山の概あり少時にして  
下田港に來り和歌浦丸に搭す時正に四時なり夕陽已に潮に映して涼影掬す可し

瀛船海上

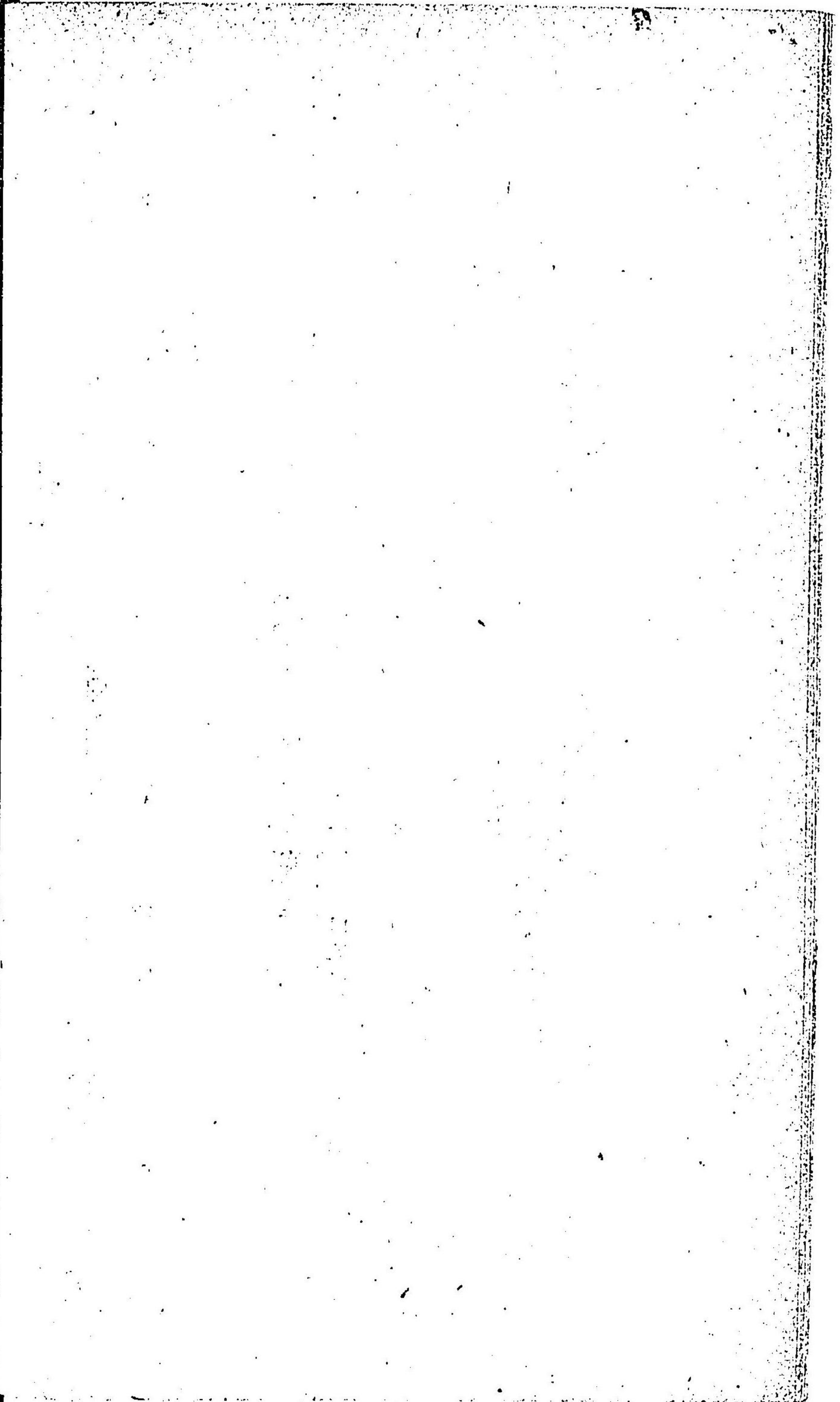
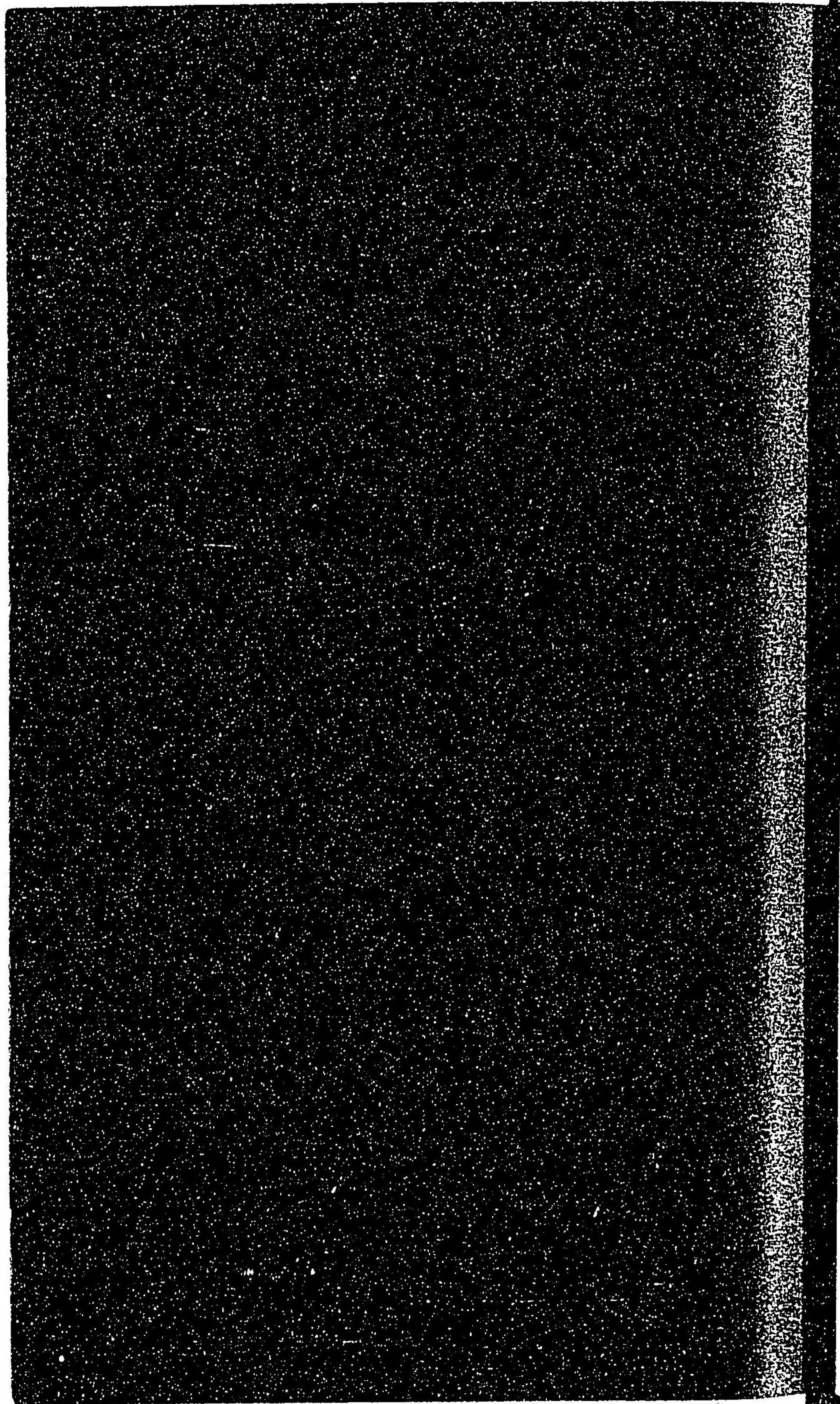
午后五時下田を發す是日風浪極めて穩に海上席の如く舟行坦々家よりも安し余乃  
甲板に立て四方を望む南は滄海漫々として天垂れ水盡き九万の鵬程復た一髮の眼  
を遮るかし北は連山高低東西綿亘し岬灣出沒岩礁の起伏所謂九十九洋の天嶮自  
ら絶佳の景色を呈す豪吟之を久ふす因て思ふ余前回の航海具さに苦辛を嘗む今日  
其難お懲りて再び此舟お上らされは何ぞ此快適を受くるを得んや天下の事一時の  
苦痛を以て終始の効驗を説く可かふざるや此の如き夫夜九時須崎港に着又一泊す  
此夜舊曆七夕の星祭に方り岸上露店涼棚相連り紅燈點々海波お映射し遊人雜沓の  
聲夜半まで絶へす反て孤船夜泊の客をして轉た黯然消魂にたえざらしむものあり

浦戸入港歸宅

十一日午前三時舟須崎を發し拂曉浦戸港お入る瀛笛一聲旭日東天に昇り孕門の山  
色笑ふか如く迎ふか如し七時短艇に乗して菜園塲埠頭に着し腕車一轉已に新町の  
寓にかへる

木履の旅

此行余家を發するとき新に木履を購ひ之を穿て行く蓋し其道路の平坦を想ふてな  
り而して宿毛以西の地お赴くに及て山岳重疊巨石突起し其峻嶮蜀道も當をらす而  
して勢中止す可からず因て勇を鼓して横行濶歩し免の如く走り鶻の如く翔り自若  
として撓ます家に飯りて之を檢すれば履齒漸靡して凡そ七分を減す昔謝靈運山行  
木履を著々登るは前齒を脱し降るには後齒を脱すと云ふ今余昇降唯一履を着け健  
行飛ぶ如し一時の狂態笑ふ可しと雖も其勝具の富み興會の旺なる若し靈運を起し  
て之を見せしめは彼安を幾籌を繚せざるを得んや聊か附記して他日の笑柄となす



冒暑錄

寺石正路

緒言

明治廿七年八月暑期休暇に際し高岡郡に小遊し其奇勝を探らんと欲す時正に秋初にして驕陽金を爍し暑氣更に一層を加ふ世人は即ち涼棚棚氷を呼び水亭瓜を割き優遊適意其苦を忘れんと欲す而して余と獨り短褐破帽炎風を排し暑日を冒し風餐露宿して山を攀ち海を渡る苦は乃ち苦なり矣而も人世の事歡樂極りて哀情多し逆境に處せざれば未だ順境を説く可からず究竟の樂地却て彼に在らずして此あるなり況んや今や朝鮮問題の禍機發裂し日清の兵已に海上に衝突す危機一髮時態正に測られざるものあり此時方りて我帝國臣民たるもの豈一日も悠々逸居を可けんや宜しく身心を鼓舞し筋骨を鍛練し一旦緩急に際しては蹶起して國に報ゆるの地をなす可し是に於てか出遊の志益決す因て題して冒暑錄といふ敢て奇を好むにあらず聊か實を表するなり

鏡水橋

先舉二大綱

確論

伏筆

八月三日午前六時家を出つ市街を西断して雁切川橋を渡る舊道に循ひ行く數町おして鏡川橋南岸に達す橋は今年三月落成するところ奇觀四國新道中一二ありといふ朝倉枝川を過り八時吾川郡伊野町に入る

### 鎌田堰

市街の中央を西に離れて仁淀川原に出づ河幅五六町余あり水量停蓄して兩岸に漲ぎり紺碧藍を浸すが如し蓋し鎌田關の上流なるを以てなり關は川の西岸鎌田村字御茶屋堂より東北に向ひ斜に伊野村に達せる長さ三百間の杭堰にして御茶屋堂の水閘より水を西岸に導き大内高岡中島の諸村を過り耕田五百五十四町を灌漑す實に承應三年より明暦元年お涉り野中兼山の經營せる大工事の一なり杭堰の中央一の筏越あり上流より下る船薙刀狀の前擺を用ひ巧みに飛流奔湍の上を操縦し行くも亦奇觀なり

### 耶會渡場

鎌田關の下河水西岸に集まり東岸は平砂曠遠として輻數町に及ぶ沿ふて南する十余町耶會の渡場お至る舟を俄て河を下る

兼山之功  
不輪  
劉晏

### 仁淀川

此邊河幅又大に水深からざるも流清く香魚の隊をなし行くもの一々數ふ可し下る三四町伊野の浦喜山近く東岸お峙ち大内の大元山西岸に逼り流水淳澁又鴨綠色をなす而して川口よりの下船前に擺を掛け後に櫓を搖かすもの後先二三陸續として流に放て行くの様眞に畫中の趣あり

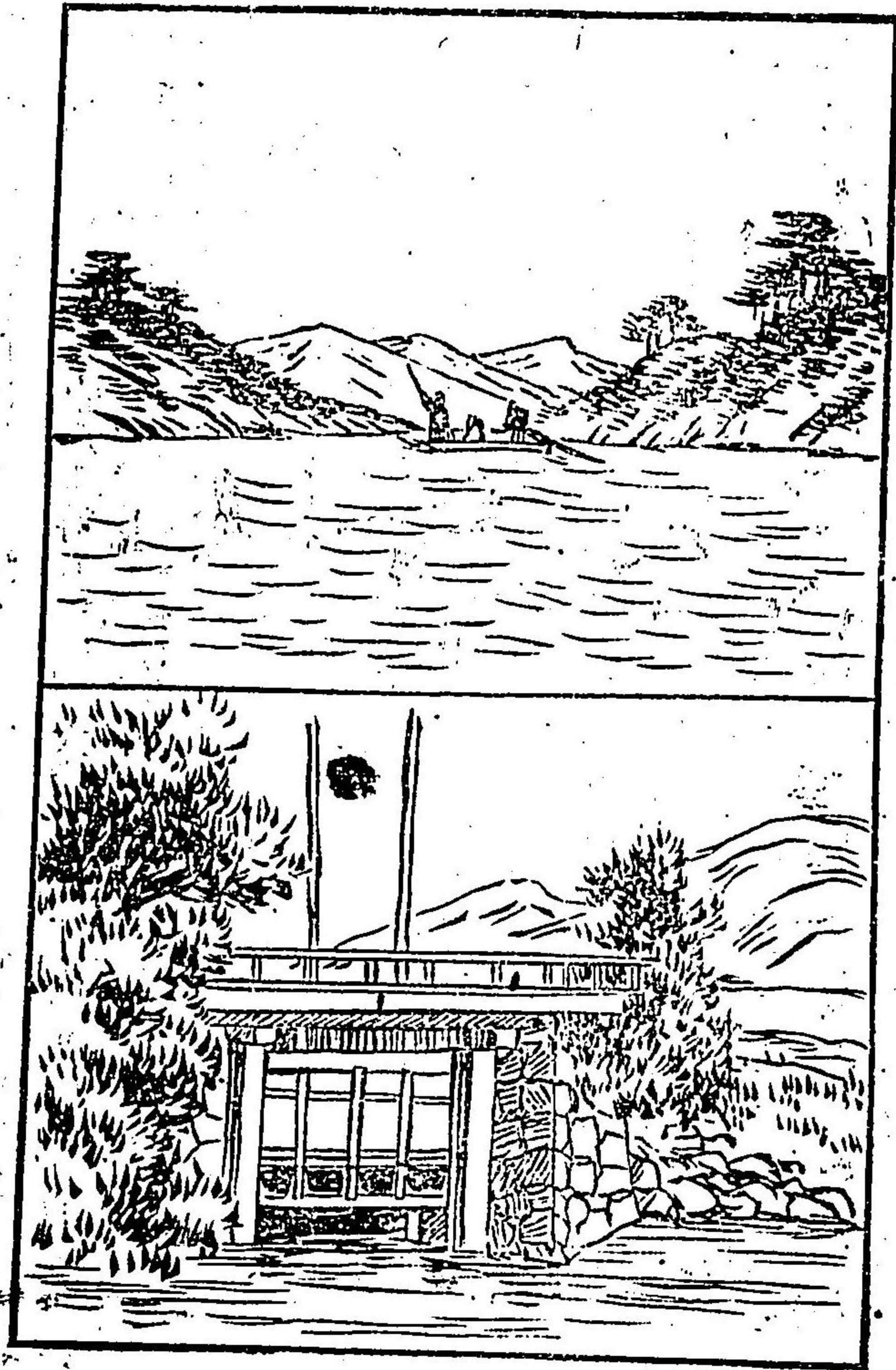
### 八田關

浦喜大元兩山の逼る所を八田關となす又野中兼山の慶安元年より承應元年に至る迄前後五年を費し經營する所なり關の長三町四十八間八田村字大井流より斜に西北に向ふて仁淀川を遮断し大井流の水閘より河流を東岸に導き弘岡、新川、秋山長濱、を経て浦戸港内に注ぐ耕田八百三十七町余に灌漑す兼山鑿する所の運河にして舟楫の便ある是を第一とす蓋し上流より筏下し並に前擺後櫓船の下るや大抵此運河により新川に赴く者過半なりといふ而して此關大石大杭を以て築くと雖も川の水勢壯大なる爲め毎年洪水の後大破を受け修繕の費常に千余圓を超過す是を以て東岸大井流の傍一の筏下して設くと雖も其破損を慮かり舟船の通行を許さず

宛然如晴

曠世事業  
此句一

八田關上流仁淀川



八田關井流本門

文亦如  
奔馬

與三末段  
紙一新聞  
紙一相呼  
前之製干  
後之製干  
製之製干  
之盛殖產  
知盛可レ  
候

而して余が舟師極めて狂暴にして遂に船を驅りて之を下る關の上下水面高低の差一間余に及び下流は關止めの巨石縦横散亂して暗礁の如く急流奔激勢ひ奔馬の如し舟師吶喊して篙を揮ひ左撞右突巧みに之を回避して行く是より又下る數町おして山舒び水緩に河原超曠として神心初めて安し

船戸

午前九時高岡郡船戸に着す乃ち舟を捨て衣を解いて河水に浴す涼味十分にして頗ふる快適なり河原を過ぎ村落に入り遂に船戸人家に達す鎌田關の下流市街の中央を貫き水量激漫として景色香美郡舟入川上流に似たり

高岡市街

是より一路稻田の中を徑し高岡市街の中央に出づ街上至る所新聞紙帛を開いて清國開戦の談噴々たるを見受ぬ而して兩旁の家々夏蠶製絲の業盛み座繰器械の音啾唧相聞ゆ由來高岡の名産秋梨子を窠とす近來生産の聲至る所に流行し殊に高岡の如き率先して養蠶製帛の業に着手す其進歩現今佐川に亞いで郡中一二に達せりと

説及三歴  
史一

更二及墳  
墓一之境  
轉廣

次郎兵衛  
之勇猛存  
于其口碑  
其奇今住  
於其岡

蓮池古城

六

高岡を過ぐれば蓮池なり路旁小邱を古城山となす實に太平氏十三代の城迹なり大平氏に藤原秀郷の裔にして吾妻鏡に所謂蓮池權頭家綱の後なり世々蓮池高岡、大内、波介、北地、甲原、出間、塚地、用石、新居、宇左、龍、猪之尻、浦内、才畑、仁村、木塚凡て十七村一万六千二百九十石を領す所謂土左七人衆の一人なり永祿九年權頭某に至り秦氏の爲め敗られ戸波積善寺に自殺し亡ぶ山上一丸、二丸三丸、濠池等の跡歴然として存し古城八幡に短刀折鐵の遺片を留む而して太平氏累世墳墓は南方波介村字四方寺東谷に在り無數の五輪塔林立して荒涼を極む太平氏已む亡ぶるの後秦氏の族吉良左京進親實之を領す親實剛強にして秦氏の柱石たりしも天正十九年故あり自殺す今山上東端に吉良明神を祭るは之が爲めあり親實の勇臣勝賀野次郎兵衛實信亦殺さる俗に傳ふ七人御先は乃ち親實の臣實信等七人の魂魄ふして蓋し親實冤枉を以て憤死し其臣僚七人亦相逐して戮に就く是に於て七士の遊魂漂泊して或は夜々仁淀川を渡り或は近旁を徘徊して之を邂逅するものは御先に行合ふと稱し乃ち病を得て死すと其言の不稽素より取るに足らずと雖も

一時疑心暗鬼の怪異續々踵起し今に至るまで國人一般に御先を恐れ兒童走卒と雖も其名を聞いて啼を止むるは洵も當時諸士の冤枉深く人心を聳動せるを知る可し實信の墓は城山の南方芋岡山に在り其闕死の場は今山下千頭氏の邸前麥畑の中に在り松岡時敏翁撰奥宮曉峯翁書の紀念碑建てり余此邊の古迹に遊ぶ已に兩回なり東搜西索備さに其地理を諳らんとす今日山下を過ぐ平生の史癖勃發禁する能はず遂に又山を攀ち城迹を見み勝賀野碑を以て低徊之を久ふして過たれ蓋し蓮池の古城山は叢爾たる一培墟に過たらず而も其土佐國史に關係する遺蹟簇々として攢集し殆ど枚擧す可からず讀史の癖あるもの何ぞ一遊して馮吊一番古を撫するの慨かある可けんや

踏切橋

蓮池城山を南西に離る十余町効野平遠にして山勢も亦高からず稻田彌望遠く山麓に達し或は嫩芽を抽くもの或は新穂を吐くもの早稲晚稻參錯相交はり綠雲黃穰々として秋穫の富卜す可きなり而して連月旱天にして雨少なきも諸溝水肥え灌漑足り農家皆欣々喜色あり蓋し上流山中は充分の雨恵を得たるに由るといふ戸波川の

七

茲一培  
樓待二高  
文一而赫  
耀天下

上既田惟上

に一橋あり踏切橋といふ之を過ぐれば波介村なり橋下一茅店あり清潔からざるも一老松の青蓋を覆ふありて涼陰清風を生じ極めて佳適なり小憩之を久ふして頗る煩暑の苦を忘る

出間村中食

波介村より以往道路すべて山の北麓を紆回し芋、麥、楮等の畑間を徑し十一時半出間村に達す人家七八軒大道の左右を夾む又途上の一小驛なり一旅店に就て中食せんとす地僻にして魚肉鶏卵なし僅かに梅干を得て之を喫す古人曰く菜根を咬んで百事做す可しと又是旅中の一佳興なり時に炎日正に天中し暑氣赫々殆ど昏倒せんとす旅店の裏堀井あり水深して涼なり乃ち之を汲み寒水を肌に濺ぐ數回四体酒然として又汗滴を留めず臥榻に横臥して休する少時清風稻田を吹き度り習々万斛の涼氣を送り身心爽然として初めて塵外に出づるの想ありき旅店主人曰く此地高知須崎間の真中央にして東西凡四里二十五町余但だ東方は稍々十二町の數を減すと

岩戸

出間村を西する二十余町岩戸驛に至る瓦屋十余軒參差し肆店亦清潔に道中の一佳驛あり

戸波川

戸波川の源を名古屋坂戸波谷より發し屈曲東流戸波の諸村を灌漑し新居に至り仁淀川に注ぐ岩戸の西方天神社の森を南に迂回するところ初めて之を渡りぬ河幅五六間おして大ならざるも水量多くして藍色を帯び遊魚潑刺たる人をして濛梁間の想わらしむ遂に衣を脱し一浴す涼氣頓生して神心蘇回す因て又健行勇を鼓して發す

太郎丸村

太郎丸村に至る戸波川南より北に流れ戸波橋之を架す河を夾んで兩岸人家櫛比し旅店商肆皆佳潔なり蓋し戸波郷中主要の都會あり西岸の中宇鉄砲辻と稱する所あり明治廿五年撰擧競争の時民吏二党の衝突して血を踏むの所なりといふ

惠良沼の古跡

永正十四年津野刑部少輔元實一條氏の將安並出間と戸波の惠良沼に戦ふや軍大に

正路遺蹟ノ  
惠良沼合戦  
戸ノ北畠  
町余ニ在  
リ今猶ホ  
現存シ沼  
中ノ菜々  
産ス正家  
氏ノ正家  
氏ノ正家  
其物語ア  
リテ本記  
ノシテ正  
ストイフ

幽趣可  
掬

十  
敗れ士卒沼中に陥りて死する者數を知らず世に是を惠良沼の合戦と稱し國史に  
著名なり余太郎丸に來り其遺迹を問ふ土人曰く惠良沼の遺迹今知る可からず唯だ  
村北若干里に惠良澤の遺名あり恐らくは此地ならんと余一たび之に赴かんとせし  
も四百年の事遺蹟湮没し且つ滄桑の變今あして之を吊ふも漠然たるに過たすと遂  
に至らずして己ひ因て聊か記して後遊者の参考を資く

家俊

太郎丸より戸波川を迂して溯る一里余の間を家俊といふ山麓稍逼り地平亦漸く高  
きを覺ゆ而して村落人家稻田竹樹の間を點綴し鶏犬の聲相聞え悠然太古の想あり  
家俊の北方若干里字積善寺に太平權頭墓あり又見ずして過ぐ

市野々驛

市野々は戸波谷の殆ど西端に在り太郎丸に亞で郷中第二の村落なり人家廿余軒皆  
山坂を據り概して陋穢なるも唯一旅亭の清潔なるあり就て茶を喫し休憩す

名古屋坂

市野々を出で西方戸波川の上流狹谷を紆して溯る十余町にして初めて足指の仰ぐ

予嘗過  
名越嶺  
有木詩  
何處女  
叫聲月  
石影松  
影映松  
影映松  
合疑無  
路燈明  
知有車  
家不確  
暗不見  
暗不見

を覺ゆ即ち名古屋坂なり高さ海面を抜く殆ど二千呎に及ぶ而も北方戸波谷は地勢  
自然に高きを以て山麓より僅かに十町ふして絶巔に達すへし頂上須崎灣並龍岬半  
島の山脉眼下に在り眺望開豁なり二茶店あり皆不潔なりと雖も登渉の苦甚しきを  
以て旅客一憩して過たざるなし南坂は二十四町にして山麓に達す其間坂道崎嶇と  
して傾斜稍急かりと雖も素より峻坂の名を下すも足らず之を宇都野坂に比するに  
殆ど伯仲のみ唯だ北坂之樹木蓬密し鋤犂の痕山谷に遍ねく南坂は短岬点綴し問々  
古松の數株道旁を簇生するの異なるのみ其綠陰翠色を垂れ行人涼を納るゝの便あ  
るは又山中の一快適なり

中平元忠墓

名古屋坂を下れば吾井郷の平田なり小流を渡り錫杖坂に出づ縣道又此所を通過す  
初めて人力車電線の通過を認む道旁中平元忠の墓あり元忠兵庫と稱す半山城主津  
野氏の族なり驍勇兵を善くし威名一世に震ふ永正十四年惠良沼の合戦津野元實敗  
死するや一條氏の將安並彌三出間九郎兵衛等其勢に乗じ一鼓して津野氏の本據を  
覆さんと欲し翌日兵を引いて須崎に向ふ此時に方りて津野の良將皆惠良沼に戦没

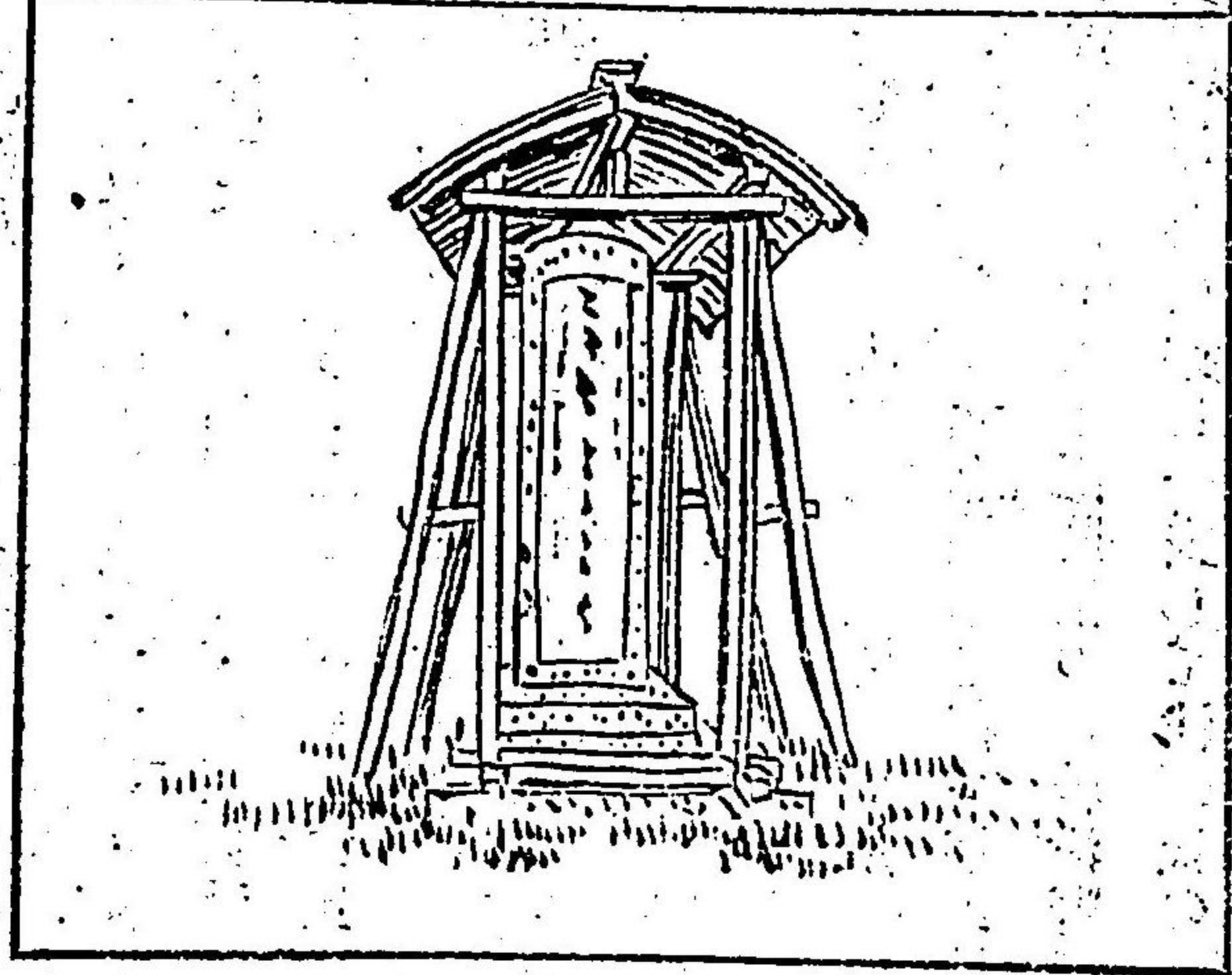


男悍有之  
張翼德之  
風一津野  
氏之盛非  
偶然一

先叙其  
爲人其  
而後及  
墓碑一  
序有法

今土崎中  
平氏即兵  
庫之裔

名古屋坂



吾井郷錫杖坂中井兵庫墓

没し一城震動す元忠獨り悍然精兵を提げて進み吾井郷お血戦し出間を擒にして安  
並を走らす是より一條氏亦恐れて兵を出さず津野氏の勢力勃然再び旭日の勢あり  
蓋し永正文以降我土佐七人守護の中嶄然先づ頭角を抜いて所謂齊桓の五霸に於  
ける地位を得し者は津野氏あり由來津野氏形勝を占め英主に富むも惠良沼の一敗  
大勢已に瓦解す此時お方て敵兵破竹の勢を以て懸軍追撃す元忠吾井郷の勝利な  
りせば津野氏の覆滅實お躍を旋さよりしなり嗚乎元忠の如きは實お武門の柱石一  
代の英雄と評す可し墓石沙岩にして高さ六尺余幅一尺七寸厚八寸位碑亭を設け之  
を庇ふ結構本山坂全山の秋田氏墓表お全じ其表面の銘左の如し

土州高岡之郡内津野元祖仲平氏藏人頭經高公十一代孫山野内孫次郎兵衛尉之高公四  
代孫子吾井江崎田之住仲平兵庫助元悠尊鏡之塔也

孝岩院殿前兵庫助節叟道忠居士覺靈

元龜三壬申歲霜月念二日壽七十八禪逝去當于延寶七己未載季夏初八覺居士嫡子清忠  
及々嫡子忠光遺子沙門禪人繼耀道日光比丘造記之

裏銘左の如し

爲供養祖黃粟菩薩戒弟子繼耀晃比丘造立之

按するも元忠は津野經高十五代の孫にして後土御門帝明應四年生れ壽七十八にして正親町帝元龜三年歿す乃ち永正十五年の戦は其二十四才の時なり此碑は後延寶七年曾孫沙門道晃の建つる所とす

鴨神社

錫杖坂より新道沿ふて南する數町多之郷に至る新道を離れ西方田畦の間を徑し鴨神社に至る蓋し須崎村に鴨神社二ツあり一は上郷に在り京都上賀茂宮を遷し一は多之郷に在り全下賀茂宮を遷す並お名社にして津野氏累代崇敬の所たり上郷の鴨社には享徳二年藤原高秀、文明十三年藤原元勝、永正三年藤原元實、永祿二年藤原定雄、の棟札あり皆津野氏の世主なり多之郷鴨社には天正七年公文藤藏人助首藤親房本願小外記首藤俊光の棟札あり藤藏人は津野氏の家老なり鴨社は此の如く其建立の古さのみならず歴史上の因縁深さを以て其名夙に須崎近旁に高く靈驗の赫灼たる近旁に比なしといふ多野郷の社は小丘の南面に在り樹林葱鬱として境

内幽邃に社殿大からざるも莊重自ら人をして肅然たらしむ庭下華表の旁奇異の一石塔あり實に八百比丘尼の塔と稱するものなり

八百比丘尼傳説

八百比丘尼の傳説荒唐信す可からずと雖も父老口傳の儘之に記するに往古白鳳の以前須崎近旁に大坊千軒と稱する繁榮の浦あり一日漁人其浦にて奇異なる人魚を獲たりしが浦中の一女子年猶は幼あるもの匍匐して行き彼の人魚を攀ち之を舐りしに後ち成長して極めて長壽を享け諸國を遍歴して若狹の國に留まり行年已に八百歳の頃土左ふ飯り産土神なる鴨大明神に此石塔を寄進せるものなりと

按するも若狹八百比丘尼の說世に傳ふる已に尙し和漢三才圖會に曰く

若狹國空印寺在小濱八百比丘尼木像窟本尊役行者與院相傳昔有女僧住千此其齡八百歲而容貌壯美可三十五六歲仍稱八百比丘尼按唯不遠敷大明神而此比丘尼亦保數百歲而猶若年實若狹國名目相合乎或謂下食人魚然者非也

蓋し土左國の老傳の如き恐くは若狹の口碑につき其出所を付會せるならん瀧澤

此一節破  
僻說俗談

白日出  
無二遊形

馬琴は其平生の博識を以て八犬傳中に諸書擧ぐる所の八百比丘尼傳説を集め其衆説矛盾して虚實據るなきを難じ八百比丘尼は唐山の小説所謂李八百の亞流ならんといへり  
抑も鴨社は津野氏の養祖藏人經高の勸請する所なり經高延喜十三年伊豫へ遷り後三年土佐に来る乃ち其白鳳大震の前所謂大坊繁榮の時代鴨社の無き事明かあり何ぞ大坊の住人八百比丘尼と交渉を有せん哉往年肥后國熊本近傍の岩屋に檜垣姫の古像を出す一時喧傳好事者傳へて奇談となす而も本居翁の玉勝間おは其偽物たるを断せり此塔の如き其製作の奇古なるを見れば實に軌近三百年五百年來の物ならずとすを得るも之を以て八百比丘尼お付會するお至りては其無稽何ぞ檜垣姫の古像と撰ばんや

鴨社石塔

所謂八百比丘尼の石塔之花崗石を以て之を造り先づ下方に平き四角の臺石あり其上高一尺六寸幅一尺六寸五分四角の臺石あり四面各一個の梵字を刻す今磨滅して讀む可からず是より以上は十一級の四角なる笠石を重ね其上に燈籠の火袋あり

收拾不レ  
漏是所レ  
記一於遊

又其上に一箇の四角なる笠石並寶珠形の冠石あり總高地上より一丈六尺余に及ぶ明暦万治の頃野中兼山氏一時此塔石を船載して高知に廻はし自ら泉石の飾となし而して神社に付するに米十俵を以てせしことありしか寛文年間兼山歿するに及び又此社お復するお至る久野三助の陋巷淺説によれば燈籠の火袋と九輪の頂石は野中氏の添ゆる所なりしが寶永四年の大震おて九輪を失ふといふ蓋し今の頂上寶珠形の冠石は其後の添加にして兼山の加へたる燈籠石と共に沙岩おなり石質全く全体の塔石と異なれり

新道

鴨社より故路に復し大間橋より新道に出づ左は入海を控へ右は斷崖を負ひ風景頗ぶる豊后別府大分間道路に似たり余須崎近旁に来る己に數次なり而も新道落成以后は今回を以て初となす眼界の新奇之が爲めに爽然たり

須崎浦

午后六時須崎浦に著し古市町岡本屋に宿す食后市上を散歩す又平生の景一々之を記せず夜分煩暑甚し出て、海濱に遊ぶ涼を納る人絡繹として笑語の聲相聞也而し

此等句非下  
宮二於勝  
具二若三吾  
能レ下長服  
々々

錦浦光景  
宛然如

其繁華亦  
非偶然

實字有力

市街

て、飛濤の聲、松籟の聲、と和して、鞞然、櫻々然として、轉た、夜色の清絶を加ふ。  
四日曉起又市中を散歩す往時の佐川街道は浦の中央糺町に出でしかば大夏巨店と  
皆其近旁に集まりしに近時縣道東端古市町に通し且つ汽船埠頭の乗出處並荷物問  
屋等皆全しく東面に集まりしかは今は繁華稍東半部に遷つるの傾あり全市の區域  
は稍廣濶なりと雖も人家の結構甚だ雅潔ならず而も地勢國の中央に方り東西船舶  
の輻輳する所且つ高岡郡山中の物産の輸出の唯一門戸となり形勝自ら國中の要鎮  
なり

津野神社

朝食の後津野神社に詣でぬ市街の東端漁家部落の中に在り方二間の小堂にして瓦  
葺の新建物なり津野氏は又當國の名族にして藤原仲平の裔なり延喜十六年藏人經  
高初めて下國し子孫相襲て羽山に居る采邑津野山椅原等四百八十余町に跨がり五  
千貫の領主と稱す文明年間一條公下國の時其勢力の強大を恃んで之に下りず累世  
角執して相凌熾す而も一時權威大に張り實に土佐國七雄の霸主たるの望あり已に

して秦氏大に興りて其氣焰を失ひ遂に其族親忠を養ふて嗣となす慶長五年關原役  
後親忠故あり自殺し家絶ゆ蓋し須崎の民は津野氏の遺民なり今日政体維新海内舉  
りて王者の民となるも誰れか其祖先歴史的の舊誼を忘るものあらんや是を於て近  
年有志者相計りて企畫茲社を興すに及びしといふ又人世報恩の一徳義を成就せる  
ものと謂ふ可し

須崎入海

須崎は四國島第一の良港にして南は直に太平洋に向ひ大半月狀の外灣と更に括弧  
狀の内灣を有き外灣と西水谷崎より東中の島戸島を以て門戸とさし直徑一二里其  
内東面ふは有名なる野見の良港を有す内灣は西門屋東勢崎を以て門戸となし奥  
行一二里土崎に至り盡く通例須崎港と稱するも其内灣を指すなり灣の内外水深く  
大船自在に出入するを得可く而して二三百噸の小船に至りては深く土崎近旁迄進  
入し若くは所によりて古倉沿岸等に直寄するを得可しといふ港面此の如く大なる  
を以て船舶無數輻輳するも唯た市街近旁の局部に止まり全港濶然として一片の艦  
影を見ざるか如し其規模の雄大なる之を肥前長崎に比するに敢て一籌を輸せざる

單刀直入  
予年少寓  
於吾井郷  
村一里距  
須崎一里  
餘因歷遊  
當有詩其  
今錄之以  
一粟一詩  
曰一樹依  
煙樹依稀  
雨正晴  
歸帆帶  
得夕陽  
明松魚上  
市不  
價不

覺も彼の讚岐の多度津伊與の三津濱八幡濱の如き少も天然の形勝なく唯人工の設計を施こし小蒸流船の往來を以て足れりとするもの之に較すれば殆ど兒戲のみ而して彼は中國九州の要津を控へ繁華日に加はり夙に其聲名を諸國に播し是と南國の僻地に處して人跡未だ稠からず未來繁榮の望さへ猶ほ遠きは洵に慨嘆の極といふ可し想ふ將來四國鐵道布設の企果して成就する秋は初めて我土佐國が其寶庫を開くの日なる可し

押岡渡船

四日午前八時古倉より船に乗して須崎入海を渡る煙波一碧鏡を磨する如く四面の峯巒影を海面に例寫するも亦畫趣なり舟子曰く此邊海の深さ五六尋乃至十余尋大船の往來を妨げずと余平生の地理癖勃發禁する能はず益須崎港の海面無二の良港たるを信し舟子を促がして高談舟の着するを覺へざりき

押岡谷

八時半押岡に上陸し小流お沿ふて渡る兩山相逼り地盤漸く高く稻田麻畑左右相望む頗る戸波谷お似たや

説及三地  
文學可レ  
見ニ該博レ

鳥坂

進行一里にして鳥坂を攀づ坂路長かからざるも稍峻なり十余町にして絶嶺に達す一茶店に就て憩ふ山は蓋し名古屋坂の連脈にして南に走りて龍岬半島の主軸を成すものなり岩石は共に古生紀の沙岩角石なり東を望めば奥浦の入海近く脚下に來り晴色一碧又壯觀なり

中浦渡船

鳥坂を降れば中浦なり海濱に出で船を備ふて又入海を渡る奥浦の入海は萩岬龍岬を以て門戸となす方向東より西に凹入す長さ三里水深五六尋以上に及ぶ然も港門淺く大船を通せず是を遺憾となす近來爲めに半島の内字船越と稱するを疏開し外洋に通し灣水を左右に漲洩し東口の淺洲を自然に除去せしむるの論あり余其實地を見んと欲し舟師に命じて先づ船を船越に寄せしむ

船越

中浦を離る二十余町内海の南岸更お小灣の凹入する所あり小島二つあり一を辨天島といふ一は名を忘る共に浦戸港内の巢山の半より小なり船其間を紆回して過ぐ

以三諫早  
引爲客

誰説ニ之  
干當路者

岸に達すれば鳴無村あり船越は其所小字となす岸に上り地形の大勢を見るも山脈名古屋坂並佛坂より來るもの此邊に至り特に低小となり蜿蜒起伏して丘陵の如し而して最高点海拔三四百咫宿縮地峽の幅十余町に過る如し實に絶好の開通所なり肥前の鯛浦は西北に佐世保軍港あり而して東奥諫早地峽は若干里を以て築紫海を隔つ近時開鑿兩海連絡の論あり想ふ此奥浦入海の如きも一旦之を開通する時は南洋の潮水東西兩口に往來し海底も亦漸次深さを加へ獨り軍港に適するのみならず亦尋常商賣漁業の良港となり沿岸數里の廢地をして碧瓦粉壁の繁華都會と化せむ又難からざる可し聊か所感を記して他年の野中氏其人の出づるを待つといふ

鳴無宮

是より船を廻して鳴無宮ナカノミヤに向ふ宮之山の西面に在り海上遙かに鳴無大明神の五字を大書せる大幟林木蒼蒼の前に飄がるを認む至れば社前十余間の石垣を海中へ突出し其前面を船艙所とあす船を捨て石垣へ上る大華表あり之を過ぐれば拜殿なり拜殿より廻廊を通して本殿に至る諸殿すべて海を距る十余間に過ぎず而して左右

美術家參  
考之資

後面老杉古檜之を抱繞し翠色蔚然として日光を遮ざる清涼幽邃として實に絶好の避暑場あり拜殿に二古額あり一と藤原朝臣豊雍と銘し昭化の二字を書し一は藤原豊資と銘し仁徳の二字を書す並舊藩主の奉納するところあり本殿は方二間の小堂なるも欄間楯間に雲物花木鳥獸異形の彫鏤をなし丹碧を以て之を彩どり其結構奇古おして精巧を費せること恐くは國中他社に絶えて見ざる所なる可し

祭禮

鳴無宮は祭神一言主神にして式内古社にあらざるも亦國中有名の舊社なり傳へ云ふ天平寶字の頃までは土佐郡高嶋大明神即ち今の土佐神社の神輿毎年祭禮の時茲宮に幸せし事ありしに一年飯途長濱村名村の鼻に於て數百の狼出て神人を噉ひ生残れる人々は松明を燃やし僅かに神輿を護して飯へりしかば是より神幸の事は神慮に協はざる恐ありとて止みしが今も至るまで土佐神社の祭禮に白日松明を燃して供奉するは是が爲ありと

現今鳴無宮祭禮は一年は入海の北岸奥浦に神幸し一年之全に南岸鳴無に神幸す余の着せる前日は恰々其祭禮おして神輿正に南岸へ幸して遠りし所なりといふ是を

浦内灣内辨天島



鳴無神社

以て社前の艦船場二三の渡船を繋ぎ拜殿の中粉色糺めたる奇古なる神輿並木矛を陳列し而して白丁の神人十余人疲勞を補ふ爲め枕籍して眠り居れるを見受よりき

横波三里

凡そ須崎より高知に赴く線路に三線あり一は名古屋坂通り戸波高岡ふ出で一は土崎佛坂奥浦通り内海を渡り福島に出で一と押岡島坂通り内海を渡り福島に出づ此第二の線路は南線中塚も普通の者にして奥浦より福島に至る間陸路を取らば八坂八濱と稱し海路を取らば横波三里と稱す余は此行第三線路を取り特に中浦よりは南岸船越鳴無宮ふ迂廻せしが鳴無宮を發してより舟路北に向ひ奥浦の沖ふ出で所謂横波三里の海上に浮びたり四方を望めば高低の山脈蜿蜒抱繞し或は逼る所は兩岬の斗出を知り或は開く所は入海の凹入を知り左顧右顧して應接違わらず時正に炎日天ふ中し暑氣熾くが如し而して余や獨り苦屋の下ふ假臥し或は景を摸し或は文を寫し倦めば乃ち煙を吹き髪を洗ひ清風ふ呼吸して又人世炎熱の何物たるを知らざるなり

吾兄慣用  
紙法

福島

十二時福島に着す乃ち上陸して一旅店に就て中食を喫す店內海に臨む一葦帯水を隔て龍岬半島に對し黛色依依欄干に入り來るを認む遊意勃發又之に一遊する不決す

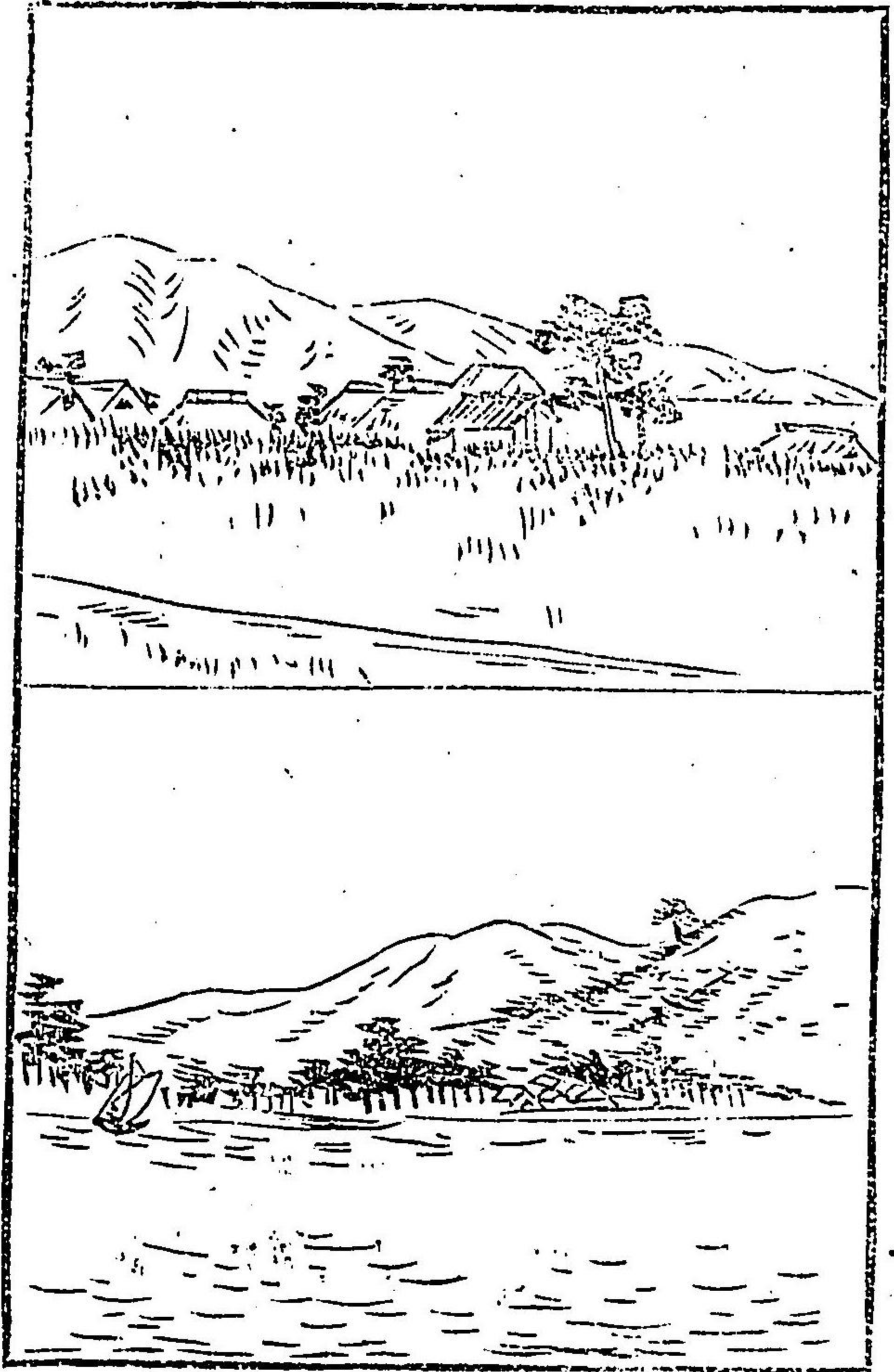
福島渡場

福島を發する時此日の土陽新聞を閱す去月廿九日朝鮮牙山の捷報を讀み覺えず慨然たり渡場に至り船に乗玄井之尻村に渡る人家二三十戸漁家商軒白砂青松の中に相櫛比す

龍坂

龍坂を攀づ坂路甚だ峻嶮ならざるも夕日西面を全照し微風動かす煩熱釜中お在るが如し而して面上流汗滴々として數行下り巾を用ひ拭ふもの數回漸くにして頂上を達せ一老松あり枝盤曲老龍の舞ふ如く登山者遠望して目標となす呼んで一本松といふ根に踞して憩ふ數時眼下近く宇左沖の淺洲一字状をなし入海の口を横斷するを認む地形を按ずるに此海門仁淀川の河口を西おさる若干距離なり想ふ此沙洲の如き又全河より下す所の砂土にして而して大洋の波浪東面より之を横壓して海

福島旅店二階より東方眺望



福島旅店二階より龍岬北方面眺望



寺爲之  
州爲之  
一遊之  
卯光景  
其和爾  
忘却再  
有之而  
之志多  
風塵累  
未之能

門を壅塞する者の如し是に於てか余益船越の開通海水の平均小灣内に往來するを得ば其妨碍を除去する難からざるを信せり坂を下れば龍村あり

青龍寺

行くこと十余町にして青龍寺に至る獨鈷山伊舍那院と稱す弘法大師の開基にして四國三十六番の札所なり建築稍壯大ありと雖も荒壞甚だ巍興ならず門前巨材を積み匠人斧斤に従事す蓋し不動堂建立の爲なりといふ

不動宮

青龍寺の門を出で左を仰げば林木蒼蔚天を蔽ひ其下數百級の石燈空に盤するを認む即ち不動宮なり攀ぢ上る半おして左方に清泉あり水清冷かり掬飲して勇を鼓し昇る途に宮に達す正面に不動宮あり大師作の秘佛不動宮を祭るといふ屋瓦半ば崩壊し檐傾き欄破れ荒涼を極む左右に脇佛の小堂あり蓋し往時寺道隆興の後一旦衰頽お歸せしに寛永年間國君山内忠義公之を再建し一時壯麗舊に復す今猶ほ宮前公の寄進の銘ある石燈籠あり而して近時三十余年前火災にかゝり全堂焼亡し爾后仮建せるもの即ち今堂なりといふ堂をさる數町山の南面奥院と稱し丈大石像の不動

像を安す蓋し后人の追設せるものなり

七葉池

青龍寺仁王門の南東面稻田の中央一箇の大蓮池あり寺傳お曰く本寺草創の時天女八人下りて一夜の中之を造る七葉成り一葉未だ成らざるに曉に及んで歸り去ると池面廣さ五六反歩許り笠大の荷葉片々青蓋を張る如く白色の蓮花其間に満開し輕香芬馥十歩の外人を襲ふ蓋し國中未だ見ざるの大蓮池なり池中鯉鰻多し並に寺房の厨料なりといふ

福島一泊

午后三時再び龍坂を越え井之尻を渡り福島に着す海水浴を試み宿樓に登り涼を納る南大洋の眺望轉た壯觀あり遂に一泊す夜西風颯吹して涼氣秋の如く三更衾を加へて眠る

宇左坂

五日午前七時又海水に浴し朝食を喫し福島を發す宇佐浦を過り宇佐坂を攀づ坂路斗絶又龍岬と伯仲す余弱冠以來此邊を往來する數回曾て以て嶮路となすもの今は

森田傳剛  
翁詩云  
隱者遊青  
藻雨花君  
子立碧汀  
烟修以充  
評語一

皆夷然視て坦途となす又旅行に慣るゝの賜なり山上茶店に小憩し之を下る

新居渡

山下を新居村となす槍術家多賀宗之の墓を問ふ土人曰く渡場の南數町帆淵に在り  
と行遊に倦むを以て見ずして過ぐ遂に仁淀川を渡る此邊河口をさる十余町水深く  
清潔錢の如し又衣を解て一浴して過ぐ

弘岡途上

吾川郡西畑に至り小邱を越る森山より新川に至る八田運河の下流を渡り弘岡諸村  
に入る沿途稻田半ば己に黄熟し良穗穰々として豊年とす可し

荒倉山

荒倉山に達し新道を攀づ道路坦平なりと雖も砂礫磊々足を噛んで歩す可からず絶  
巔に小憩し之を下る

歸家

雁切川に至り鏡水に浴し長繩手より高知市街に入る日光紅塵に反射して炎威頓に  
一層を加ふ十二時半車を雇ふて漸く家に歸る新聞紙を閱すれば我政府は愈八月一

多賀宗之  
子亦嘗立  
之傳一

収二拾上  
女一絲々々  
反一應一々  
不レ亂々  
甲々老

日。を。以。て。已。小。清。國。に。對。し。開。戦。を。布。告。せ。り。東。洋。の。問。題。是。よ。り。多。事。に。し。て。國。民。亦。果。然。  
消。夏。の。懶。眠。を。貪。る。の。時。機。に。あ。ら。さ。る。な。り。

丙申十月

辱知弟

安並正晴拜讀

胃暑録付録

再び須崎に遊び遂に野見港を見る記

明治二十八年七月海南學校暑假の際、再び須崎に遊び遂に野見を見て、以て前遊の欠を補ふんと欲す。二十九日入交勝猪同行を請ふ乃ち僧に發す伊野より仁淀川を渡り十時高岡に中食し四時名古屋坂を越え六時須崎古市町に着し旅店岡本屋に投宿す夜炎暑蒸す如く濱上を散歩し涼を納る

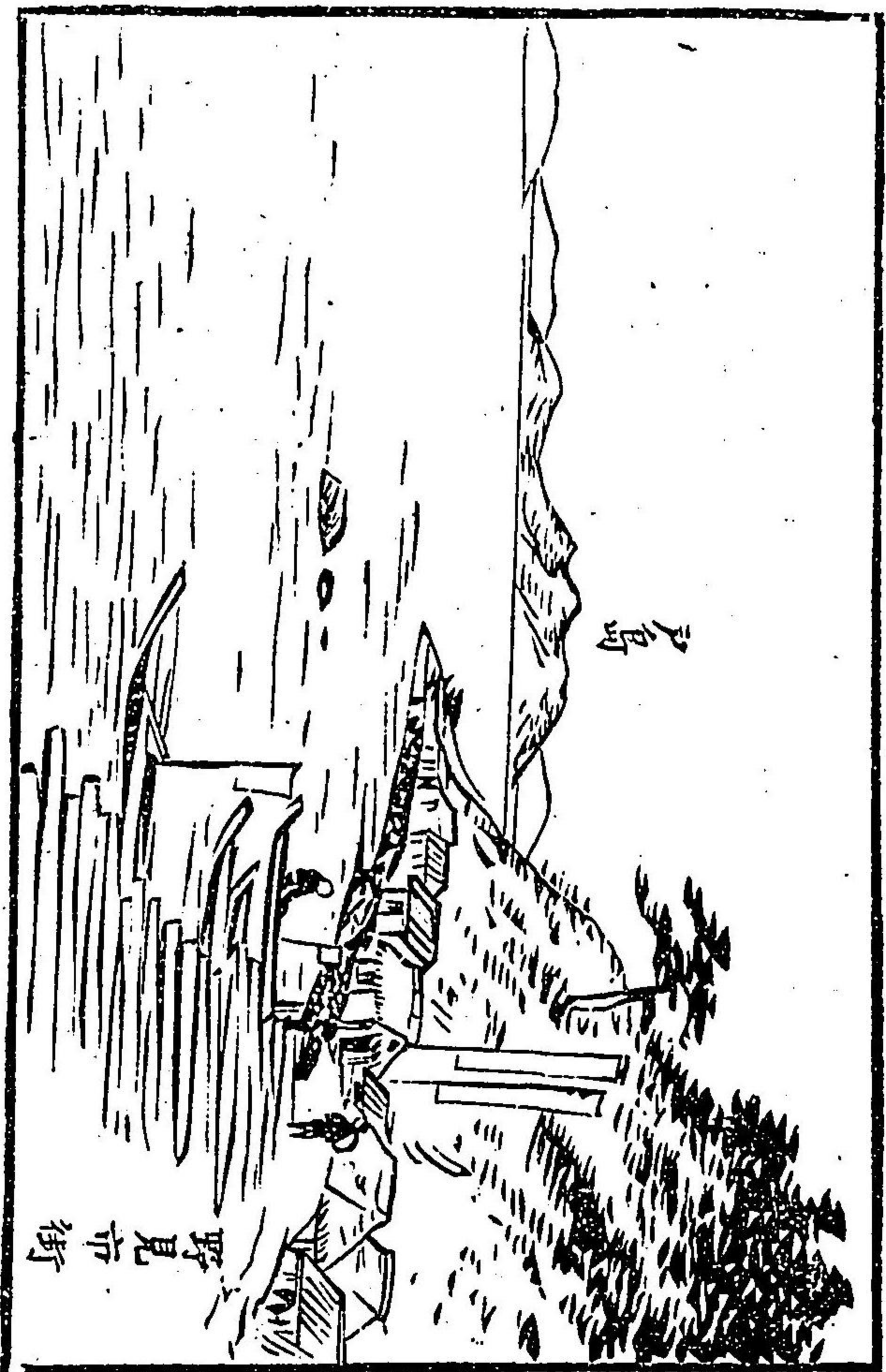
三十日早起結束して海灣へ至り小艇一艘を雇ひ野見港へ赴く須崎港門を出づるや濤勢極めて雄壯に船動揺する木葉を泛ぶが如し然して航路常に港門の左岸を紆回し亂礁屹立の間を紆餘し行く俯して水底を窺ふに藍紫色の小魚片々遊泳す極めて美觀なり之を舟子に問ふ名を知らず又海膽の海底若くは岩上に付着する者許多を見る大なるものと經一尺余あり通常諸國の物産海膽を出すも大さ五六寸を超えず今此沿海の産其種此の如く大に極めて奇品となす之を撈採して我國の小輸出とせず又經濟の一法なり長者崎を廻る頃驚瀾大に作り船体搖動すること特に甚し入交氏爲め小船暈して嘔吐を催すに至る十時ふして漸く野見港に著す

此行唯補  
前遊之缺  
故畧之於  
於此而停

歸重干  
此港

野見港の地勢たるや須崎の外灣左方に在りて豁然たる一大良港をなし山勢三介月形をなし東より西に向ひ前には戸島中島神島の三大小島を扣へ港内廣濶にして優に百余の大艦を泊るるに足る而して水深く海岸を距る十間に及ぶ直に十尋以上に達し之より少しく距れば又十五尋より二十尋余に及ぶといふ余入交氏に語りて曰く戸島の形勝は劉公島に似て野見は威海衛に似たるかからんや蓋し有名の大港あして前に巨島を扣へ以て防風兼要害の地勢をなすものは我日本に例希にして唯だ備後の尾道港前に向島を有し安藝の吳港前に能美島を有する等若干に過たず然も皆島勢大に過ぎ或は距離遠き過た並に適當の堡障をなさず乃ち他日此野見が軍港となる曉には其形勝實に彼れ威海衛に匹敵ま且つ其要害は遂に彼に凌駕するに足る可きならんと入交氏亦之を然りとす

十時港上に上陸す人家百余軒密接して畧ぼ街道をなさず悉皆漁人の部落にして年中鱒鮪鯉等の漁に従事すといふ土人に就き地勢を聞き散步少時にして再び船に乘し飯路に就く時に炎日天に中し暑氣耐へがたし遂に船を港西の小灣松樹の下に繫沓海に浴す身心爽快なり十二時須崎に著す乃ち上陸し再び岡本屋に中食し休憩之



を久ふす

午后一時須崎を發し古倉より渡船に乘し押岡に渡り鳥坂を越ぬ中浦に至る再び横波の渡船を雇ひ鳴無に紆回し鳴無宮を見る昨遊の景色歷然たり五時福島に著し海岸旅店に一宿す翌三十一日八時福島を發し宇左弘岡を経て五町目に至り入交氏に別れ車を雇ひて十二時家に飯る

丙申十月

辱知弟 安並 正晴 拜讀

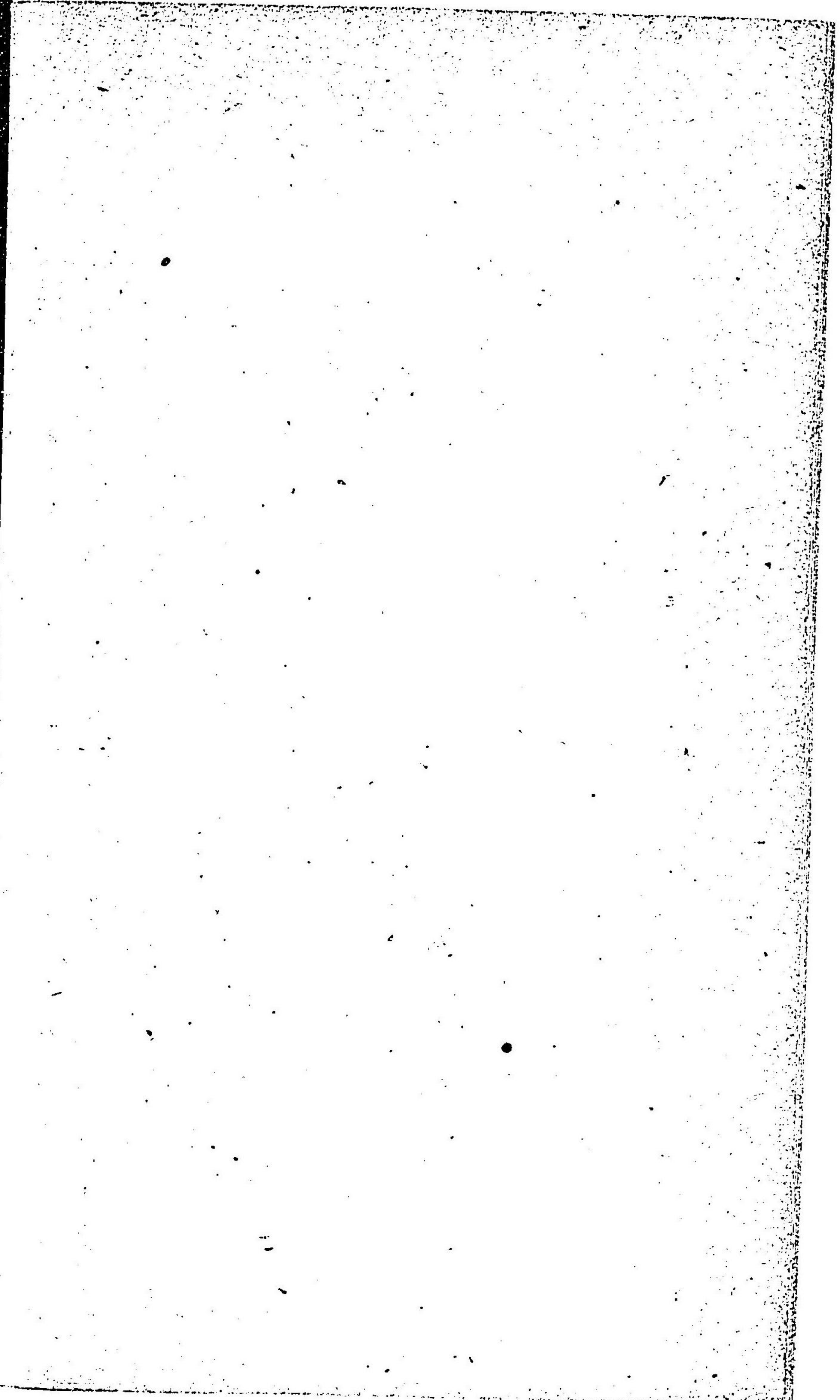
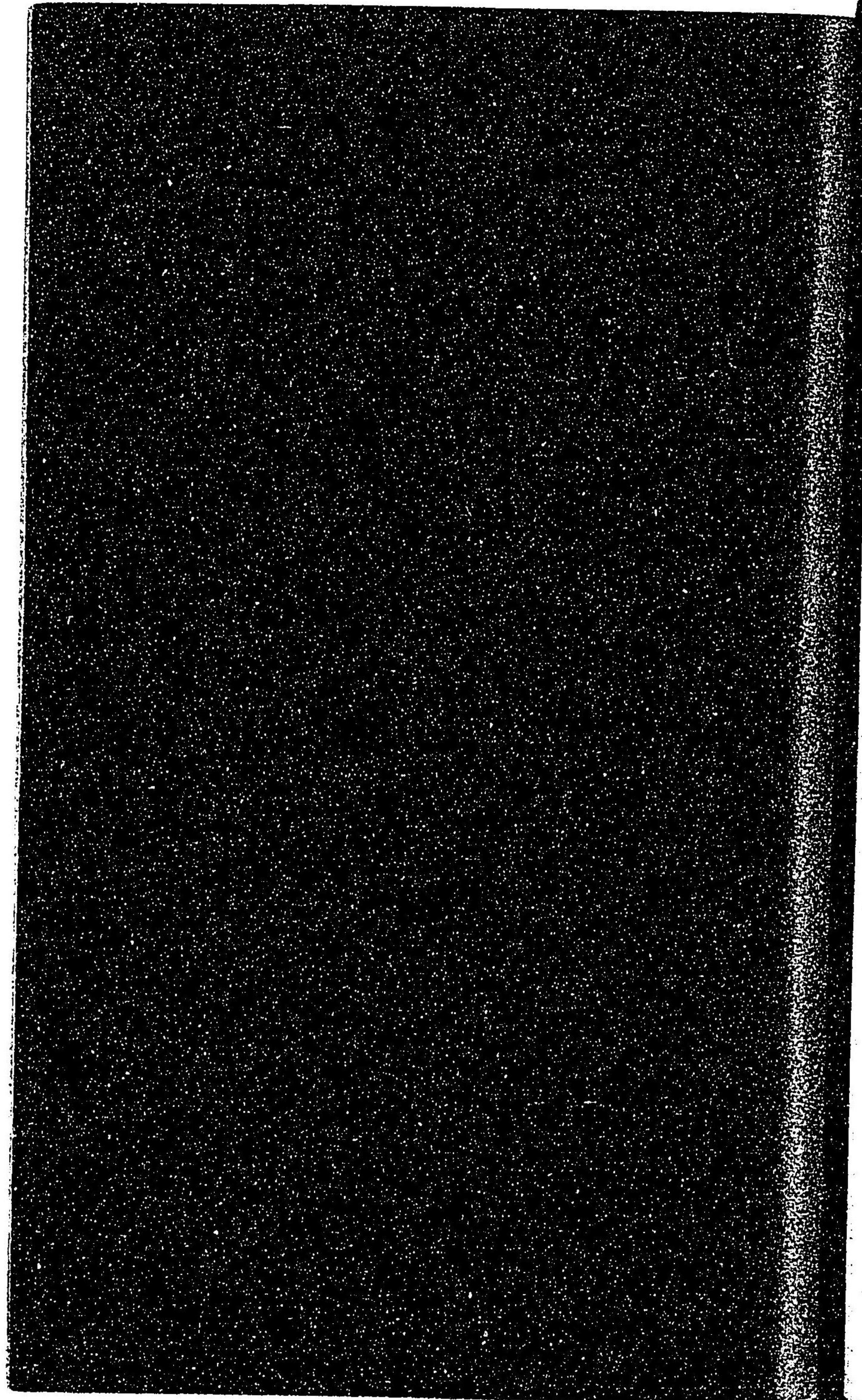
三

跋

今茲丙申夏月、予有疾、困臥累日、暑氣方酷、偶寺石杜山、寄此著索題言、繙而讀之、行文流暢、而品水評山之外、更叙關於國史者、其破僻說俗談、大快人意、讀過三四、忘酷暑迫身也、著者自名曰冒暑、蓋在著者、則冒暑、在讀者、則消暑、爲賜也多、是爲跋、

明治丙申十月

安並 正晴



蕙生嶺山紀行序

或鎮西諸州、或高幡諸郡、脚履而筆記、墨痕未乾、此篇又成、甚哉、吾杜山之富於勝具也、此篇、叙寫之巧拙、收拾之疎密、姑置而不論、予且有所望於杜山也、方今、外征克捷、版圖開闢、武威桓桓、海外人大注視本邦、邦人航海外者亦多、學者文士、豈可無所奮勵興起乎、顧杜山勝具雖富乎、近之州內十數里、遠之州外數百里、未足窺宇宙大觀也、杜山年壯氣銳、蟹行之豹脚之文亦所嘗修、若夫一朝遠遊、烏拉之於歐、喜馬拉之於亞、阿麻孫美蘇利之於米、屹岬峭聳、崩湔蕩激、勝於此篇所記萬萬矣、嗚呼、是宇宙之大觀而萬國之奇景也、以杜山椽筆記之、使海外人知君子國之富乎文材、不亦人世之一大快事乎、杜山無意焉否、書以問之、

明治丙申十月

安並正晴撰

斐生植山紀行

寺石正路著

緒言

明治廿七年八月高岡郡旅行の後七日を経て又香美郡斐生植山の諸郷に遊ぶ斐生植山は土佐國有名の深山にして阿波の祖谷山と腹背相連なり古より平氏の遺族來りて隠るもの多しと稱すされど余今回の行は尋常地理探見の目的なれば名社舊家の遺物寶器は措いて問はず唯天然山水の大觀を飽賞して自ら足れりとなす而も其沿途物に觸れ事に感し乍ち古迹沿革を述べ乍ち遺物口碑を叙し前提後應隨て論じ隨已まざるは遂に平生の史癖勃發抑えへん欲して抑も可らざるの病なるのみ呵々

山田市街

十二日午前六時家を出て大津より船入川を溯ぼり西野地を過ぐ田々の稻穀已に豊熱稜々黄雲を布くが如し九時半山田市街に入る明日舊曆盆祭を以て街上無數の佛燈籠を鬻ぎ商賈絡繹所々百貨雜菜の市を開くを見る

楠目渡場

寸陰不  
苟費

城山有  
味

區靈滿  
汗邪瀟  
車



先叙二其

亦一適

浴一

境入二旅

十時楠目村に至る忽ち物部川の大流を右方脚下に見る其河上斷崖の上人家道路を夾んで兩旁に駢列し間々老木の隠森日光を遮るゐるは又良景なり崖を下て渡場に至る下流數間三條の水堰あり河水爲めに渟滙して兩岸に漲り幅二十間許深一丈余水色澄徹極めて清潔なり垂生郷より下すころの筏材數百千本水面に浮漂して人をして先づ上流水運の便を想はしむ舟に乗じ對岸片地村神母の木に渡る炎暑甚しきを以て河水に一浴し去る

三條の堰

三條の堰は皆大木巨石を以て之を築造し亂水水面に突出し狀蒺藜の如し最も上流の者之東西に河身を横斷し東岸神母の木に水閘を設け水を佐古に導く之を父養寺堰となす中なる者は父養寺關の中央より西岸にかけ燈形に河半を遮止し西岸楠目水閘を設け水を野地に導く規模最小にして未だ其定名を聞かず最も下流の者は神母の木より楠目小田島に向ひ方向稍東北より西南に對し長百八十間の大堰を架し西岸に上中下の三閘を設く上閘は上田久禮田に中閘は西野地に水を導き下閘は舟入川にして是を有名なる山田關となす以上皆海南の神禹野中兼山の前後十余年

拈三出一  
鏡字一成一  
一篇好文  
一字筆力  
四轉

吾兄木領

に涉り苦心計畫せるものにして(但し山田關の中閘は之を除く)鏡野兩面の確磽荒蕪をして一朝數万石の膏田沃野と化せしむは實に其力なり凡そ兼山伎倆の大なるものを見んと欲せば七郡の山川搜索殆ど其際なきも此の山田關の如き特に其近邇おして現著なるものあり

鏡岩並鏡の地名

片地村神母の木より物部川南岸に沿ひ進む數町字夢野に至る傳へ云ふ上古此地水涯に鏡岩あり其面玲瓏として往來の人影を照す野を鏡野といひ郡を鏡郡といひ川を鏡川といふ皆是より起ると因て試に村の古老に其所在を問ふ答へて曰く昔は村中元標の良方小字鏡石の東崖に在り今は砂礫に埋没して見る可からずと蓋し鏡岩は角石燧石類の或一面自然の力により磨礫平滑せられたるものにして我土佐國中數箇あり其由来恐くは地ニ等よれるなる可し而して此地の鏡岩は更其歴史上の關係を帯び最も有名の者なりとなす

按するに我土佐國上古但だ安藝土佐吾川幡多の四郡あるのみ後來土佐郡を割いて鏡郡を置き今に至れる者の如し蓋し鏡野の諸村は一帯自然の長岡にして現今香美

本町筋作  
識者不  
能無  
異議  
香美  
改作  
等字  
不可  
不  
固  
泛  
論

葦生予亦  
曾遊然半

四

長岡兩郡の中央に在り東西二里許南北十余町東は鏡河の岸より西は坂折山の麓に至る所謂楠目山田野地等の高原是なり是に於て土佐郡の中より一時其長岡地を割いて長岡郡を置きしに後又其地面の大に過ぐるより更に鏡野一帯の沃野を割いて鏡郡を置きしる可し鏡郡の字後世香我美更お畧して香美に作り鏡河の名後世沿岸に物部氏住み物部の姓地名に用ひられしより物部川と改めらる若し夫れ今日お至りては鏡岩己に没し川名郡名の出所を失ひ且つ鏡川の名は尙しく高知の小河に移つり輓近新しく之に橋梁を架するや又鏡川橋の名を命ずるに至る名實混亂し本末顛倒す百年の後古傳墮没し口碑消失し或は再び町村市名の改革等お際せば香美の郡名は「かみ」と讀み上流葦生山中に楮紙の物産あるより此名を生せりとの付會牽強説を生するお至るも計る可からず聊か杞憂の爲め一言之を便叙すといふ

葦生郷

片地を過ぐれば葦生郷なり葦生郷と香美郡中有名の大郷にして物部川の上流兩岸に跨がり西東奥行十五六里山田關より溯ぼり阿波國境に達し南北幅員三四里乃至五六里長岡郡豊永郷より安藝郡の間お蟠かまる村落總計四十六所あり其區劃の大

別左の如し

- 下葦生南岸 萩野より吉野に至る 九個村
- 下葦生北岸 白川より谷相お至る 十四个村
- 上葦生兩岸 南岸は根須より永瀬 十二个村
- 北岸は大井平より日浦込 十一个村
- 奥葦生 柳瀬より久保川上流 十一个村

地勢皆河の兩岸山腹の斜面地に在り片地より葦生野に至るまでの間は峽勢緩く谷合舒び所々坦然小平野をなし水田相連なり良稻の産するを見る是より以奥は山逼り峽束ね斜面急にして畧お平地を見ず森林には杉、檜、松、樺、を出し畑地には楮、茶、桑、麻、蜀黍、を産す就中材木紙茶之郷の大産物にして其後、に編み船お積み川を下るもの日々相接す物産輸出の盛なる吾川郡仁淀川谷、幡多郡渡川谷、と並ひ稱して國中の三大谷と評さ可し。

橋川野

片地村夢野より宮口、杉田、川奈路を経て橋川野に至る葦生郷の入口なり人家十余

白之閑僅  
窺ニ其門  
戸一而歸  
及レ讀ニ  
此篇之念  
遊之念又  
起

所謂莖豆  
腐兄未レ  
食否

確評

軒田圃の間に点綴し下方遙かに物部の大流蓋を浸すが如きを見る北岸は即ち白川の村落にして瓦屋參差山腹青蒼の崖に攢簇す景色吉野川上流に似たり

太郎丸

戸波郷亦有太郎丸村予未レ知ニ名解所ニ以起一

次を太郎丸村となす山舒び野緩に水田彌望人家又聚落をなす傳へ云ふ中世永徳年間大洪水あり上流下流の村落田圃一時浸襲荒涼を極めしを村民竹内太郎あるもの此地を開墾して舊に復す因て太郎丸と稱す又此里に武内重意俗稱際藏といひ五鳥山人と号するものあり好古の嗜あり歴史に通ず慶應四年年七十四にして卒す著はす所五鳥山房筆録といふもの今猶は存し韭生郷平氏の歴史古迹に就て詳細の記述をなすといふ余屢其人名を聞く而して未だ其書を見ず今日此地を過ぎる恨くは翁を地下より起して親しく其議論を上下する能はざるを

野尻

太郎丸を過り野尻に至る二部落あり河の上に在るを上野尻河の下に在るを下野尻といふ並に人家數十軒道路を夾んで小市街をなす上野尻の上更に山脈稍南方お遜け河岸の高原超曠として一大平野を占す所あり是を韭生野といふ實は物部川岸の

無限感慨

一句結上起下

大野にして又韭生郷の中心たり有名なる川上大社茲に在り

川上大社

川上大社は延喜式に大川上美良布社と稱す谷秦山の式社考に曰く

大川上美良布社

在韭生野二舊事紀素蓋鳴尊八世孫有健飯賀田須命此命鳴部美良姬爲妻生一男大田々禰古命續日本後紀曰仁明天皇承和八年八月辛丑以土佐國美良布社一預官社三代實錄曰清和天皇貞觀八年八月己卯授土佐國從五位下大上川美良布神從五位上

乃ち其祭神は健飯賀田須命或は鳴部美良姬なるが如し現今縣社の一に列し特は韭生郷四十六村の總鎮守といふを以て威徳極めて盛なり神社は拜殿、本殿、社務所等共お白木造り茅葺にして回廊を以て相連なり結構宏壯の中自ら嚴肅の氣味あり境内老杉古檜蒼蒼蒼天に差し綠蔭清涼途上の好避暑場たり社藏銅鐸あり龍宮半鐘と稱す前程を急ぐを以て問はずして過ぐ

小川吉野

説及二祭神一

大牢在土前座飯土義不レ足也

十二時韭生野大宮社前に中食し一斷溪を渡り小川村に至る炎日天に中し所謂盆前の暑氣赫灼として人を焦殺するを覺ゆ或は樹蔭に憩ひ或は溪流に浴し小休する數回氣を養ふて進む吉野村に達せば山開き田野又少しく廣豁となり人家櫛比す就中路左一軒の旅店新築にして清潔なり就て憩ふ快適あり

根須並白石

吉野を過ぎ行く半里根須村なり瓦屋十余軒山腹に攢簇す之より小邱を超過して一谷を渡り白石村に至る瓦茅舎相交はり又山腹を櫛比す此邊兩山漸く相逼り峽谷次第に蹙束して山腹の斜面も亦峭急にして平かならず顧みて來路を望めば物部川の大谷屈曲して之字狀をなし兩崖の山脈隨ふて闔ち隨ふて開き其中央山斷へ高原芥蒼天に接するの狀は宛も地平線下直に海面に接するが如く眺望極めて壯觀なり

白木坂

永瀬村を東すること數町にして物部川岸を離れ右方山中に入る溪田を迂回して一上一下し稍久ふして一坂を攀づ是を白木坂となす山勢壯偉なるも地盤已に高きを以て畧ば登坂の勞を覺えず形勝戸波谷より名古屋坂を踰るに似たり山頂に人家

省筆妙

二三軒あり東端一茶店清潔にして就て憩ふ可し

降路

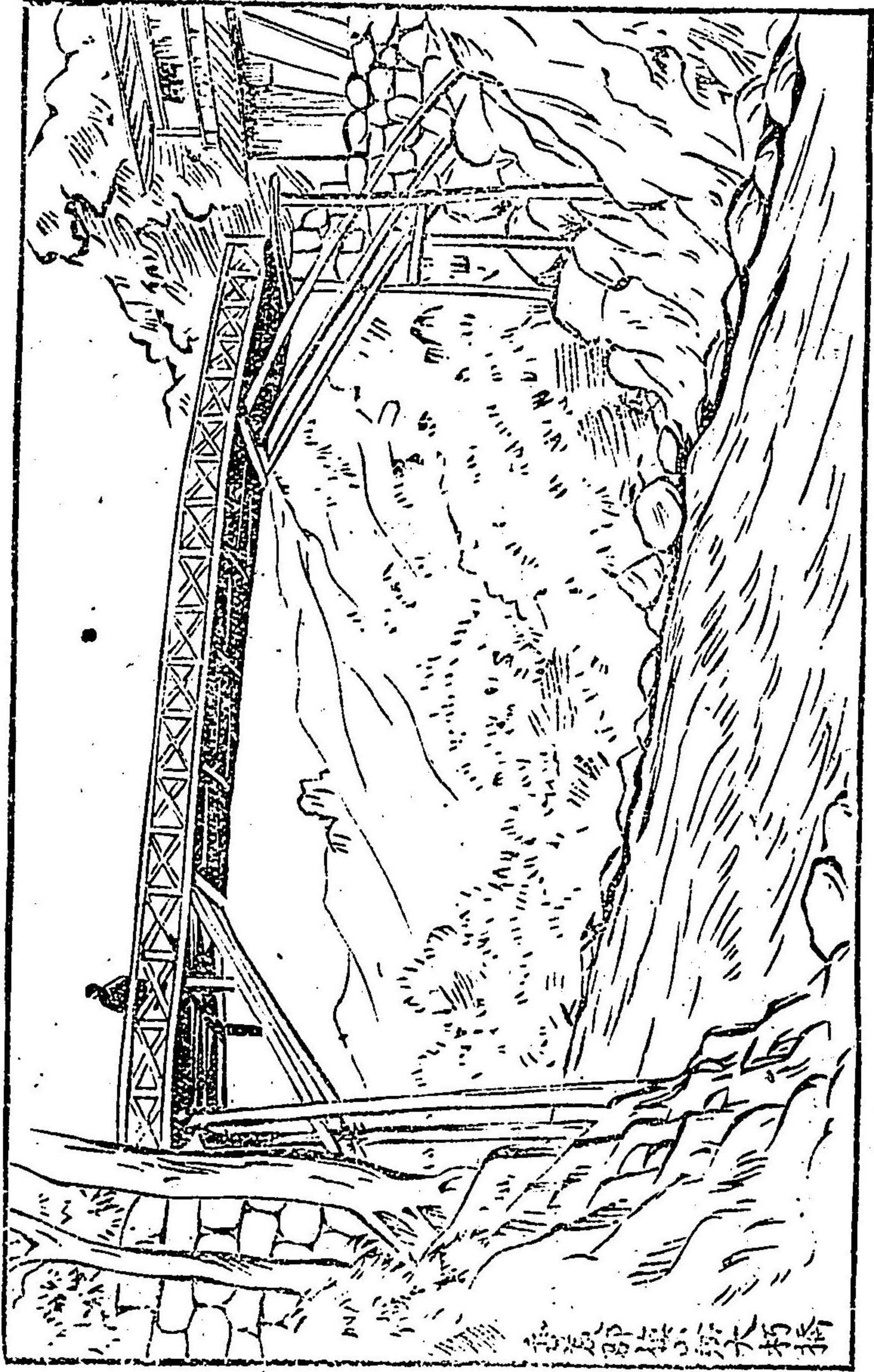
坂を下り降路に就く傾斜急峻にして斷崖直に絶谷に抵る其間上下の山畑玉蜀黍を栽ゑ稔々成長して丈け人頭より高して而して溪を隔て對岸千万峰重疊として波濤の奔る如く或之聳ゆるもの或之時つもの恣態横生一々記載に暇あらず人をして端なく鎮西耶馬溪の舊遊を追懷せしむるものありき坂路降り尽くして林木陰森の間一橋の碧潭に跨がるを見るは即ち大枋の橋なり

大枋橋

大枋橋は昔時有名なる蔓橋の遺跡にして明治十五年以降今日の木橋となる其地勢槓山川の下流に當り兩山相逼り幅二十四五間となり而して山麓は兩面共に直立して道路を施す可からず中間の溪流深さ一丈余停蓄青藍を浸すが如く平時舟楫を以て渡すを得るも霖雨の候は水肥る流急に舟行を絶す是に於て遂に兩山の間支柱なし大飛橋を架すに至る木橋の長十余間許幅五尺余兩岸孰れも大木を組んで枕木となし更ふ其枕木の上に小枕木を載せ遂に兩岸の小枕木間を大木二本を通して之に

排異奇崛

以下記事  
益密



是以百間  
不見如三

板子を敷き欄干を設く橋梁の用材すべて檜木なり西岸に橋番あり渡錢を收む試に之を過ぐるに中央歩に隨ふて動搖して己ます快行すれば乃ち然らず蓋し蔓橋にあらざる雖も橋製の粗軟延長之を來すあり嘗て聞く非生の蔓橋水面を距る數百尺下無底の深潭に臨び過ぐる者俯瞰すれば覺えず躊躇すと而も今日親しく其遺跡を見るに水面より中央橋桁迄の距離僅かに七八間お過ぎず而して河底も亦急流と雖も深一丈内外のみ天下の事誇張多き常に此類なり因に記す大朽の蔓橋は横山郷に屬すと雖も其蔓を取出す所は皆非生郷の山中なり故に古來便稱して非生蔓橋と呼びしといふ

蔓橋並利葛乳兒

蔓橋架設につき古來の口碑を聞くに昔時僧行基初めて其工夫をなし後利葛禪尼並全法師の二人尋で之を架設す蓋し是より先き川の下流機門といへる所に一橋あり或時一女子之を通行し誤て水中に墜ち遂に淵の窟となりて行人を惱まし怪事絶るす是に於て禪尼等頓定村字仁尾が谷の民恰も兩子を生みたるを幸に其一を買取り人柱に立て漸く架橋成就すと今橋臺の西岸七八歩の上林木芥蒼の中小第祠を認む

るは實に禪尼法師赤子三人の神靈を祭る所なりといふ蔓橋架設の目論嶺山風土記南路志等に見ゆるも今參考の爲め手近き明治六年取調の記録を抄書するに左の如し

一 蔓橋 長二十三間 幅三尺五寸 板子

水面より橋桁迄中央の高八間半

一 入費一切 二千百十一人役

一 白朽蔓凡二千貫目代四十圓

蓋し橋桁檜木は五年を支へ蔓は毎年架更せしといふ其架更普請中には大工棟梁祭主とあり利葛禪尼等の靈を祭る其祭文に曰く

先年掛け初めの尼法師のりかふ乳兒の赤子様へ神酒洗米今日清め祓ひまいらす  
る橋も諸災難の無之様御守護奉願云々

抑も人柱は人体犠牲の一風習にして其根源沿革等は余前年草せし食人風習論に已に之を詳論せり蓋し日本に在りて史上に見ゆる現著の例は仁徳帝十一年攝津茨田の堤を築く時武藏の人強頸河内の人茨田連杉子二人が河伯の犠となり嗟峨帝弘仁

引川該博  
胸中蓄  
萬卷一

三年攝津長柄橋再建の時岩氏長者が又河神の牲となり治承四年平清盛が攝津經島築成の時一童子を白馬に載せ海底に沈めし等皆有名なるものあり而して我土佐國又此人柱あり其談奇古大に人耳を聳かすと雖も亦斯學研究の一材料に列するに足る因て抄記し要領を録す讀者其蛇足を咎めざれば可なり

大枋町

大枋橋を過ぎ山腹を紆回して旋る玉獨麥甘藷の田圃前後相連あり茅舎權籬斷續相接す行く五六町にして大枋町に達す人家二三十軒一條の街をみし郵便局、小學校等あり其他酒店吳服屋藥舖飲食店等規模隔小と雖も体裁皆備にり山中希有の繁華をなす蓋し物部川上流の最盛市街あり此地近代戰國の頃公文氏之を領し天正の頃秦氏お降り秦氏敗れて後亡ぶ地勢山腹の斜面稍緩漫にして平坦なる所にあり位置高燥にして泉水亦く皆給を下方物部川谷に取る其市街河の水面を距る數町の高さに在るを以て人夫大桶を擔して日々家々の養水を汲み上ぐ但し余の來遊せるは三十余日旱天の際あるも大枋の欠水は旱温を問はず常に然りといへり深山の中に在りて一桶の水幾錢を以て賣買するは希有の事なり

佳景  
及三歴  
史一

夜景

此夜市街の西端増田屋ある一旅舎宿しぬ晩食の後出て山徑を歩せば明月衆山の頂上より雲霧遂生して下界を銷し而して金風颯颯として万樹の稍を動かし葉聲淅瀝雨の如く人をして轉た山村秋早きを感じしむ歸後眠に著く月光窓に入り涼氣衾に満ち清絶の景暎を交へざる之久ふす因て枕上一絶を得たり

片月入窓際。爽然瀟氣流。葉聲颯如雨。客枕獨驚秋。

横山郷

物部川の上流大初にて會合するも二條あり一は東北より來り一は東南より來る東北より來るものは韭生川又久保川と稱し沿岸に柳瀬、安丸、久保等の村落あり所謂奥韭生分なり東南より來るものは横山川又別役川と稱す其本支流分派の河領村落を横山郷とす又韭生に亞ぐ大郷おして

- 庄谷相 招 中谷川 頓定 大枋 山崎 仙頭 押谷
- 小濱 根木屋 岡内 別役 市宇 別府

以上十四村により成立す山田關以奥ある物部川上流は實ハ韭生と此横山の二大郷

轉結尤佳  
不レ可レレ

先説ニ生  
一後及ニ  
植山一  
當不レ失

末尾觀ニ  
四國三郎  
妙

に屬し而して地積の大小は韭生三が二横山三が一を占むるの比例なり横山物産と木材第一楮茶第二にして山間に之間々稻田あるも土民の常食は玉蜀黍、麥、甘藷等となす而して河流は水淺く石多き爲め舟楫を通せずと雖も大雨の後は木材を下すを得可し若し大枋に至れば乃ち河廣く水足り山田關に至るまで日に舟便あり故に土人の運搬は山中常に馬背により而して大枋より初めて舟運に托す其荷船陸續として下る様實に深山の中思料す可からざる便利なり彼の吉野川其流れ四十里岸遠く水深きも下流阿波に入ると本川本山の物産但だ他國に輸出するの便ありて却て自國を潤益する機少きに比せば其得失の大番を霄壤のみならざるなり

韭生横山の平氏

壽永の昔平氏西海に滅ぶるや遺族前后お分散して諸國に流寓す我南海道も亦阿波の三好郡祖谷山より我土佐の香美郡韭生横山諸郷、吾川高岡郡別枝越知諸村は山中に至るまで其踪跡極めて多しとなす而も文献微なく詳細の事實得て知る可からず唯諸家の系圖遺物を見て其來歴の大畧を窺ふを得るも多くは后世の追記摸造おかり一々信を措き難し特に高岡郡所傳の如き尤も其類の甚しき者となす然るに阿

引川之博  
考証之確  
若二柱山  
此書一而  
後是二以  
措信焉

波の祖谷山は平氏の踪跡あること世上定論あり而して我香美郡韭生槇山の諸郷是  
と疆を接し殆ど比隣咫尺の地なれば乃ち當時彼ふ潜伏する者來りて遷住する理に  
於て有り得可き事ありとす因て今参考の爲め其二郷並近旁に傳はる平氏諸族の系  
譜門葉を序記する左の如し但し其材料は南路志板山風土記香美郡志等による  
第一安藝郡魚梁瀬村門脇氏

門脇中納言教盛の後なりと稱す教盛他の平族と阿波より來り韭生五在所山に歿  
す山名を五在所と呼ぶは御宰相の義なり其系圖は教盛の三男教經拾七代の嫡流  
宇兵衛盛貞より始まる當家寶物には教盛著用の甲冑あり貞享の頃藩主に奉納せ  
しが明治維新後之を還付せらる又別に教經の矢根あり寶永年間文殊開帳の時江  
戸に出し新井白石の軍器考等に其記載あり現今本支數流に分る

第二香美郡韭生郷久保氏

教盛の二男從四位下越後守國盛の後なりと稱す國盛壽永元年他の平族と共に阿  
波祖谷山に入り阿佐莊に居る子孫阿佐氏と稱し教盛の旗を傳ふ其系圖を按する  
に國盛の後六代に及び但馬守貞吉なるもの初めて土佐韭生に來り山田の大中臣

氏と戦ひ遂ふ之と和し久保莊に居る源兵衛盛利なる者の世及び天明八年七月  
廿六日夜不時に山潮湧出し主僕二十八人の外第宅田畠黄金の猫刀劍武具等數十  
の寶物共ふ一時埋没し家系乍ち斷絶せしむ藩主其特殊の名家なるを愍み盛利の  
從弟窪大八盛臣の長男高助盛中を召し出し家督を續けしむ爾來子孫連綿支系繁  
衍して今日に至る

第三香美郡槇山郷小松岡内並專當氏

小松内大臣重盛の男新三位中將資盛の後と稱す資盛元暦の頃逃れて槇山郷岡内  
村に來る子孫小松氏を稱す寶物に達磨の古畫十六善神の古畫胸輪一ツ古狀五通  
等あり系圖を按するに資盛より十代の后中務宗正なるものあり宗正二子を生む  
左の如し

小松太郎右衛門介

專當入道沙彌善住

右衛門佐は岡内に入り子孫岡内又小松を稱し庶族蕃衍して今日に至る沙彌善住  
は仙頭に入り槇山專當職を務め子孫專當を姓とし今日に至る仙頭は專當の假借



字おして其職名姓字を以て地名とせるものなり  
菲生楨山等の山中おて平氏の子孫と稱する者大抵右の如し其教盛資盛等來國の傳説は正史變なく容易く之を信す可からずと雖も其子孫門葉の漂泊茲お來るは又戰國亂離の世有り得可きの事おして必ずしも一々排斥す可きおあらず況んや此山中古傳の如きは其材料著實おして過奇ならず其証跡穩當にして浮誇ならず之を横倉山帝陵の有無論に比するお論據の精粗素より全日の談にあらざるをや因て特お掲記して讀史家の參考に供ふ

小松神社

菲生楨山の平氏お就ては已に上お述ぶる如しされば世人は此等の山中に在りて小松を姓とするものは擧て一流にして桓武平氏の后胤たる論なしとなさん然も茲に一の歴史的大疑題あり乃ち楨山郷別役村お延喜式内の小松神社の存在すること是なり抑全社は式内の社といへば其神号の出所決して桓武後胤の小松にあらざる事明白あり而して其祭神未詳なれば夫ど何等の判断となし得ざるも谷重遠氏は是を以て仲哀天皇八年來朝せる秦の功滿王ならんといへり其式社考の文に曰く

喚起下文

引三秦山  
翁文一爲三  
証左一

小松神社

在大忍里庄被山別役村此郷小松氏多蓋其祖也度會延經神主曰姓氏錄云太秦公宿禰秦始皇帝三世孝武王之后也男功滿王仲哀八年來朝男融通王應神十四年來朝又云大里史大秦公宿禰全祖秦始皇五世孫融通王之後也三代實錄云清和天皇貞觀七年秦宿禰永厚等賜姓惟宗朝臣永厚等自言秦始皇十二世孫功滿王子融通王之苗裔也蓋小松功滿也猶融通作三月月也奏大里惟宗三姓之祖神也陸奥國子松遠江國敬滿恐皆全神耳

考証精確にして畧不遺論なし但し古人と雖も歸化人を祭るは理の稍奇怪なるも延喜式等には韓國の神名等累出するあり特に秦氏は祖先こそ何國なれ歸化の後本朝の名族となり子孫蕃衍して國家の勳臣名門となれば乃ち後人の其祖先を祭るは敢て濫祀にあらざる若し果して此小松神社を功滿王となす時は乃ち楨山々中の小松氏も恐くは尽く桓武平氏お非らざる可し然りと雖も現今に至りては孰れの小松氏が秦氏孰れの小松氏が平氏なるか其區別をなす可からず殊に其各家の所傳は皆平氏を引きて秦氏を引かず豈お後世の人山中小松姓の多きより延喜式千年前の動し難

大然大然

呼應上

証據、心付かず、壽永前後の口碑、參酌して系圖を作り以て平氏の庶胤と稱し口傳久しきに涉り回襲の半なる遂に抜く可からざるに至りしもの乎、非乎、實乎、海南歴史の一疑題にして他日の推究を待ちて之を決す可き也

鹽峯神社

十三日朝氣の涼に乗じて大切市街を發し鹽峯坂を攀づ坂路三四町おして頂上お達す茶店二三軒櫛比相接す路北一大華表の屹立するを認む傍に標柱を建て鹽峯公土方神社と題す蓋し槇山郷總鎮守の社なり華表を過ぎ入る社前の馬場清潔にして掃痕拭ふが如し本殿は方五尺拜殿は縦三間横二間半の茅葺にして結構豫想の如く大ならず祭神は奇日方命にして勸請年月は未詳となす柳瀬貞重の竹木筆剩に曰く、槇山郷鹽峯公土方六明神の祭日十月晦日なり太夫七人夫々の役わり勾當、別當、神主、社人杯名あり坐列昔より定りあり無官おても有官の上に坐すなり云々蓋し祭禮には頗ふる古風の儀式あり現お今日にても七人の「ミヤウド」と稱し祭儀に當りて一種の役名を保ち夫々の職業を行ふ者ありとぞ其役名を聞くお左の如し

神主 我神 勾當 無役 熊押 坐預 六別當

亦是史家參考之資

在大水則急頭瘦然有  
則水在急頭瘦然有  
則水在急頭瘦然有  
則水在急頭瘦然有

飲一

願導者伏

仙頭村

鹽峯坂を下れば仙頭村なり槇山川東より西に流れ兩山攢嶮して河幅狹縮し加ふるに連月の旱天を以て水瘦せ砂出で往々川底を露出し而して人家村落は扶踈として山腹斜面に斷續し蜀黍甘薯椿等路の上下に成長し風物蕭涼なり此村上古は石内柳上、小田々等の諸村に分れしお天正前後專當左工門大夫合して一村となし專當村と稱し後又今字に改むといふ元標高知を距る十一里二十町なり此日暑氣漸く甚しく數々溪流を掬飲し渴を隣す快甚し

押谷蔓橋

仙頭を過ぐれば押谷となす槇山往還の支線小字「シラリ」山より「コヤト」山に至る間に蔓橋あり一人家お就て導者を雇ひ赴いて之を觀る斷崖を迂回する數町大道より離れて下方に降る大木蒼蒼として溪流紺碧を浸すところ果して之を得る架設の規模先づ獼猿桃方言「シラクチャカツラ」を採て二大線を造り兩岸大木に繫た長き河幅と等しき檜木二本を其下に横架し無數の小蔓線を編織して其檜木を獼猿桃の大蔓線に纏絡し以て支柱なくして墜ゆるなからしむ而して檜木の上に板子を敷

在<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>危<sub>レ</sub>峻<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>平地<sub>レ</sub>坦<sub>レ</sub>途<sub>レ</sub>浴<sub>三</sub>

所<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>割<sub>レ</sub>愛<sub>一</sub>

き往來<sub>レ</sub>便<sub>ニ</sub>す橋の長十五間幅三尺五寸水面より橋桁迄中央高五丈橋下水深五尺河幅十三間あり試に之を歩するに中央搖撼已ます極めて危峻の思あり而して土人は荷物薪木を負擔して放歌自若として行く又一奥あり余亦勇を鼓して之を渡り對岸に小憩し橋圖を摸寫す是より再び橋を復渡し橋下の川水に浴す樹木叢生し日光水面<sub>レ</sub>透<sub>ラ</sub>ず冷氣骨に徹し殆ど人生八月の何物<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>を忘却するなり凡そ横山山中有名なる蔓橋三所あり一は大柘一は押谷一は岡内とす大柘は明治十四年以後改めて木橋となる其他は乃ち舊を存す押谷は實に其一ありといふ

飯程

余已に押谷蔓橋を見る是より以奥岡内別役に至るも蔓橋小松神社の外別に奇觀の見る可き者無きといふを以て遂に歸程に決す蓋し蔓橋は岡内を見ざるも押谷と同規なりといへば畧が其大觀を領す可く又小松神社は式内と雖も地僻にして今日文献の徵す可き無き已に上文に論せる如きを以て跋涉紆回之一訪せざれば已まざるといふ必要なければなり

大柘再泊



香美郡生蔓橋圖

蔓橋碑

蔓橋在高知城東北八里槇山鄉余久聞其名願一遊而來能也今茲丙午鄉人小松正利竹  
內重意等相議欲立碑於橋側乃錄橋之奇製與其緣由而何土居千里以請銘於予按其所  
錄兩山對峙水注其間欹石亂立奔流激怒不可着橋脚也岸上有蔓似藤其質堅實俗謂之  
白朽蔓先造長梯以為橋以大蔓二條繫之兩涯大樹又以小蔓編於梯之兩邊稠密如網以  
為欄橋幅三尺長十三丈八尺欄高過肩遙望之如蛟龍躍雲間纔履板則全橋搖使人目眩  
脚酸不勝危懼土人乃能慣之負擔健步猶坦途也傳言上古有利勝禪尼始造此橋後屢壞  
墜不能速修鄉人愛焉弘仁中弘法大師遊此境為祈誓之然後橋每朽敗則邱人出能造者  
一人如有神助後人德之建禪尼及大師祠於橋傍以祭焉余始得審橋奇製與其緣由雖未  
遊之境狀景在眼前喜茲橋之終不朽而余之文亦得藉以永存因為之銘其詞曰  
織蔓為橋、干彼水涯、惠此山民、往來得宜、誰造之者、利勝禪尼、誰護之者、弘  
法大師、絕壁百仞、飛駕雲螭、冷然御風、不知險巖、長橫絕澗、百世文持、奚憂  
朽敗、有神修為、何以報德、維壽乃壽、噫與斯橋、祭祀無期、  
弘化四年歲次丁未春三月

日根野亭撰

壬生璞篆隸

小松正利等建之

浴四  
浴五

肥舟  
絶景

其快可  
知

十三日午前十時再び大柘に還り益田屋に役宿す日中暑氣焚が如く煩悶勝へ難きを  
以て崖を降り大柘橋下に出で深潭に浴す林木日光を遮れり流水清潔河底を照徹し  
冷氣肌骨に沁し神氣爽然より日暮又之に浴す天籟颯颯として秋聲山に満ち人をし  
て仙ならしめんとす此日舊曆盆祭に當る家々大小の佛燈を点し新鬼舊鬼を迎へ夜  
色轉々惨悽より

物部川の下り船

十四日午前十時晝食を喫し大柘町を發し物部河岸に降り船に乗ず船は長さ五間幅  
一間底板平かにして舳艫共に薙刀狀の櫂を施し船師二人前後操縦し行く全行二  
三人乃ち發す兩岸の山勢眞立相逼り屏風を立つる如く其下奇巖亂立鋒の如く刃の  
如く船其間を下る左廻右旋して遙避暇あらず大抵川中の急瀬危灘十余ヶ所あり就  
中大柘より永瀬に至る迄の間川中大石多く之に加ふるに上流槇山川韭生川より放  
流する筏木溪口の狭き所に填因し左に避くれば右に觸し右に避くれば左に觸れ河  
幅逼る所僅かに一間四五尺に過ゆる所あり船師放歌自若として之を排開して下  
る奔流艇を撃て激越聲あり極めて壯觀なり其石少なく水肥るる所に至れば舟行一



物部川下流

駛、直、行、矢、の、如、く、兩、岸、の、斷、崖、北、は、梅、久、保、大、井、平、永、野、よ、り、南、は、蕨、野、白、石、根、須、吉、野、等、忽、ち、迎、へ、忽、ち、送、り、光、景、輕、換、し、て、眺、望、飽、く、な、く、紅、葉、青、山、水、急、流、の、概、あ、り

物部川下流

永野に至り船を岩汀に繋ぎ一客の導を以て上陸して冷泉を飲む神冷かに腸涼に一  
時煩暑の苦を忘る是より以西山勢次第に開舒し峽も亦曠豁なり而も危礁所々に林  
立し急瀬雷を轟かすは乃ち上流に譲らず白川近旁に至れば水量稍大に河面溶々初  
めて大河の觀あり神母の木に著する頃は暮色蒼然とし遠より至り河上一段の涼氣  
を覺ゆ

舟行時間

此日大柵を發し神母の木に至る時間左の如し

十一時二十五分 大柵を發す

十二時二十五分 白石に寄岸

一時五十分 小川に寄岸

二時三十五分 小川を發す

三時三十分

野尻に寄岸

五時

神母の木に著す

沿岸諸驛に寄船するは乗客の便宜上陸せし爲なり其水路距離舊里程五里を下る時間すべて五時三十五分但し小川驛にて四十五分の停泊あれば實際四時五十分を過せず而して船中は一切櫂を用ひず前後すべて薙刀状の櫂を用ひ水を盪せず岩を避け流水自然の力に任せて自在に浮び下る又其河水速力の急あるを察す可し但し單純に河水の船を下す力のみ就て之を概算すれば其速力一時間五哩余の割合なり

夜行

神母の木より船を捨て上陸し再び河を渡り楠目村に著す盆祭の燈籠家々に閃くを見る山田市街より後免に入れば日已に暝す一旅店に就て晚餐を喫し船入川岸に沿ふて大津に出づ

大津川

大津より再び樓船を賃して川を下る時に大月已に東天に登り清輝晝の如く潮流滾々として水満ち石鳴り而して兩岸の山影樹木蒼茫煙の如く唯だ盆燈の点々遠近に

此一節筆  
呼應上

文一息匠  
益緻密

明滅するを認め清絶の景人をして飽賞措く能はざらしむ昔時紀公の舟を下す又是の清觀を領するを得るや否や

歸宅

新地に着すれば夜正に九時半涼燈水に映して人影旁乎し猶は薄暮の如し昨來山中に在り備さに清涼の滋味を享く家に飯れば煩暑赫々夜熱蒸すが如く又依然る紅塵の苦界なり呵々

好結尾

丙申十月

辱知弟 安並正晴妄評

明治三十一年四月十日印刷  
全 年四月卅日發行

正價金拾八錢



著作者

高知縣士族

寺石

正路

高知市南新町  
四十四番地

印刷者兼

片桐 猪三郎

高知市種崎町  
九十八番地

# 發兌元 發賣所

高知市種崎町

開成舍本店

全市本町下一丁目角

開成舍第一支店

全市本町三丁目

開成舍第二支店

# 大賣捌書肆

東京神田區  
表神保町

東京堂書店

全 神田區  
裏神保町

上田屋書店

全 淺草區  
須賀町

杉村書店

全 芝區  
今入町

田中高知堂

大坂市東區  
備后町

吉岡書店

全 南久太郎  
町四丁

武田書店

全 榎通町  
心齋橋通

岡本書店

市中發賣

高知市種崎町

澤本 駒吉全  
山中 專助全

小川 代次  
村岡 書店

●開成合發行書目

士陽新聞記者富田幸次郎君序文 (第三版發行)  
土佐丸事務員坂本喜久吉君著

# 航海紀行

一名土佐丸歐洲航行記

全壹冊 正價拾貳錢  
市外郵送稅 四

四面環海の櫻花國戰勝の結果日本郵船會社は非常の英斷を以て歐洲航路を開始す是れ誠に百年の大計一時天下の人心を愕然たらしめたる豈故ならんや、本書は乃ち最大唯一の土佐丸が劈頭第一旭旗を森々たる海洋に翻へして之が魁を成たる航海紀行なり、其香港の市況錫蘭の靈境將又西歐諸港工業の遠大



商業の繁盛なる況んや同船事務員坂本君、豊富の才學、能腕の美筆を以て、其文章流暢、言論奇抜、記事細明なる眞に寫し得て妙ありと謂ふべし、冀くは購讀せよ、海國の丈夫一たび緋けは髣髴として眞境に逍遙するの懐あらん

野口寧齋題詞 宇田滄溟著 新刊發賣

# 龍上偶語

洋綴全 正價金

壹冊 五錢 郵稅四

錢郵券代用二割増

俊傑傳あり、畸士傳あり、詩文論あり、一括して龍上偶語に存す、眞に千紫萬紅の觀あるのみ。作者は是れ詩人宇田滄溟君、雄心勃々虎嘯、呵筆せるもの、此人にして已に此書あり、讀者若し一緋せば趣味津々不覺快哉を絶叫せしむべし、月下清涯孤燈の邊、友とし誦するも可也

前宮内大臣伯爵	土方	久元君	題字
陸軍中將子爵	谷田	干城君	題字
前高知縣知事	石岡	英吉君	題字
故從四位勳二等	丸岡	莞爾君	序文
前土佐郡長	濱口	眞澄君	序文
前吾川郡長	三浦	一竿君	序文
前衆議院議員	小松	三省君	序文
海南學校講師	西森	眞太郎君	跋
翠軒松野尾章行翁	全儀	行君	合著

第二版發行

# 南海之偉業

一名野中兼山一世記

兼山自筆書翰挿入

洋綴大形全壹冊紙數百七十餘頁  
正價金貳拾五錢  
郵稅六錢

大坂朝日新聞批評古今の學者說一家を成し名天下に著はるもの鮮から  
 す身匹夫より起りて王者の師とあるもの亦之れなきに非ず獨り其學の術と業とを  
 以て之を事無に施し利を後世に遺すものに至りては前代の儒流に之を見ること殆  
 ど罕あり南海の偉人あり野中兼山と曰ふ天資剛邁夙に  
 朱學を修め年僅に二十二藩の執政に任じ溝洫を通じ荒田を墾し港灣を築き漕  
 運を便にし物産を殖し其遺澤今及んで朽ちず誠よ  
 偉功と謂ふべし兼山の爲す所のもの今日に在りては固より企て難  
 前代に在りて兼山と其蹟相肖たるもの無澤兼山とあす然れども兼山の備藩に於け  
 る其功成り身退くに暗闇せざりしなり晩年言を獻じ將軍綱吉の旨に忤ひたりと  
 雖も書をして終り後世其徳を讃するものなし兼山に至りては然  
 らず政令峻刻強奢人に過く遂に群謗奇禍招きて賤謫の間に死す  
 其跡實に悲むべきなり編者其遺業の湮滅せんことを  
 恐れて此編述あり其志尚に美ありと謂ふべし

自由黨總理 伯爵  
 高知縣中學校校長  
 滄溟漁史  
 農商務省技師  
 農學士農藝化學士

板垣退助君序文  
 澁谷寬君序文  
 宇田友猪君序文  
 澤野淳君演述

# 農業集講話

洋綴美本 全一冊  
 正價拾二錢  
 郵税二錢

農國に生るもの、農書を讀まずして可な  
 らんや、農書を讀む、將先づ何に於て之を求むべき。  
 簡よして要切よして實精にして確、夫れ唯  
 だ農業講話なる哉、れだ農業講話なる哉。

河田小龍公羽著畫

# 土佐吸江畠志

和綴木版全壹冊 正價金十一錢 郵税二錢

我海南畫家の秦年として其名八紘に轟き三尺の童子と雖も知得するは夫れ河田小龍先生にあらずや先生は我吸江十景の歳を逐ふて古蹟の埋没するを遺憾とせられ明治十一年本書を著述せられ諸先生の題字序跋詩文和歌等を掲載し資金を吝まらず密書彫刻を以て出版せられたる良書にして先生か得意の密書と印刷の鮮明とにより非常の好評を得暫時に賣切となり今尙ほ講讀者あるも先生他國せられ再版する余暇なし或翁深く之を遺憾とし弊店へ向け勸告せられたれば直ちに是れを先生に懇請せり營利的の先生にあらずれば早速に承諾の榮を蒙り今般弊店に於て出版し廣く發賣せんとす江湖各位續々御注文あらんことを

松野尾章行翁製圖

## 高知市街圖

## 高知縣管內地圖

石版刷 全一折 正價五錢 郵税二錢

石版刷 全一折 正價三錢五厘 郵税二錢

## 土陽叢書

土陽叢書第一編

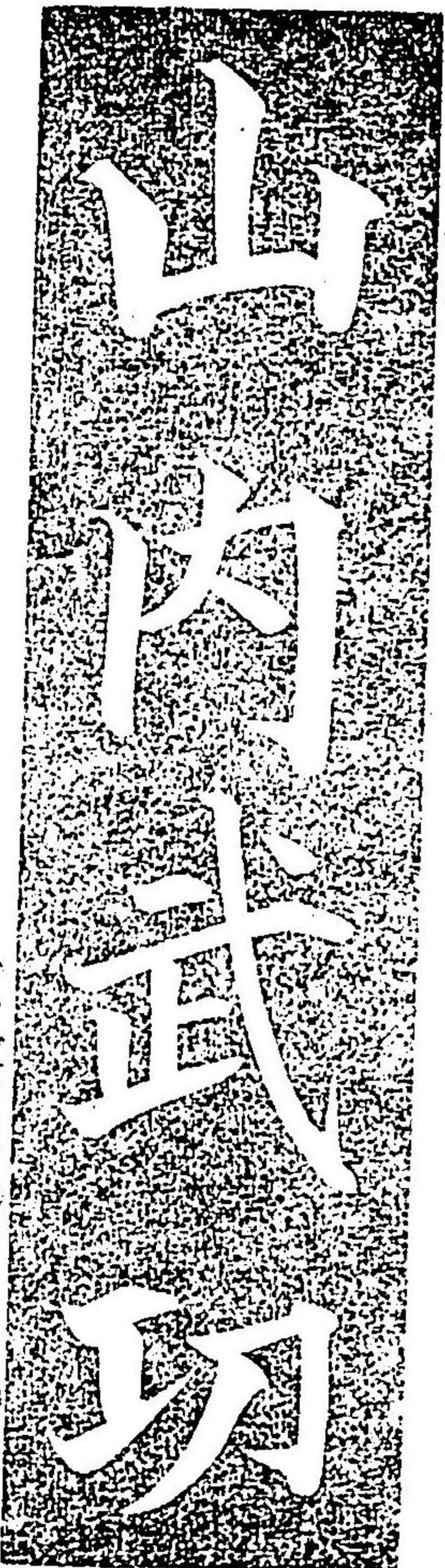
每月一回發行

# 土藩大定目

全一冊 正價拾二錢 郵税二錢

本書は封建時代に於ける土州藩の法令を蒐集したるものにして網目大凡三拾九件あり實に政務家實業家、考古家等の一讀を要すべき良書あり

### 土陽叢書第二編



全一冊 正價拾二錢 市外郵税二錢

本書は天下麻の如くに亂れし天正慶長の頃千軍萬馬の間

馳驅し彈矢雨注の中に入出して武勳赫灼遂に土國

お封せられたる藩祖一豊公の武勳記事あり

附するに臣僕の公矢石の間に從ふて奮戦格闘せる經歷を併記せり請ふ御愛求を玉

### 寺石正路君著述(土陽叢書第三四編)



全武冊正價金 貳拾四錢 郵税六錢

本書は土佐の國の風俗、美術、人物、工業、古跡

全一冊 正價拾二錢 郵税二錢

本書は封建時代に於ける土州藩の法令を蒐集したるものにして網目大凡三拾九件あり實に政務家實業家、考古家等の一讀を要すべき良書あり

### 土陽叢書第二編

# 山内武功

全一冊 正價拾二錢 市外郵税二錢

本書は天下麻の如くに亂れし天正慶長の頃千軍萬馬の間

馳驅し彈矢雨注の中に入出して武勳赫灼遂に土國

お封せられたる藩祖一豊公の武勳記事あり

附するに臣僕の公矢石の間に從ふて奮戦格闘せる經歷を併記せり請ふ御愛求を玉

### 寺石正路君著述(土陽叢書第二四編)

# 土佐遺聞録

全貳冊 正價金 貳拾四錢 郵税六錢

本書は土佐の國の風俗、美術、人物、工業、古跡

骨董等不關する**歴史上の實談**を採録せる者おして文章明暢に材料貴重ある一々精金美玉の如く**土佐國の古實**を知り**歴史**を窺はんとする者は一日も座右お欠くべからざる良書あり  
**福島鷗波子著述(土陽叢書第五編)**

# 紀貫之

附 土佐日記

全壹冊 **正價金拾二錢** 郵税二錢  
紀貫之は歌仙あり、政治家あり、貫之を景慕する者必ず仙歌と稱し政治家たるを知らず、著者茲お感ありこの文を草す、**考証正確、議論精識**益し貫之お於

ける千古の知己あり文學の士購ひ得て其正否を玩味おれ

寺石正路君著(土陽叢書第六編)

# 土佐人物傳

上卷

**正價拾二錢** 郵税二錢

南國由來武を尙ひ文を斥す況んや**鎖國三百年の間**魁偉奇傑の**土傳記**湮没し世に傳はざる者十の八九、著者之を慨し奮ふて爲めに**此傳奇**を草す、**考証の該博**にして**精確**なる**文字の簡明**にして**着實**ある、以て**正史の闕**を**補ふ**お足る

彼の尋常時流文を賣るの無責任著書と大差あり、史を嗜み古を慕ふ有志の諸士は請ふ一讀あれ

安並 茨木 兩君評、寺石正路君著 土陽叢書第七編

# 土佐古跡巡遊録

上卷

正價拾八錢 郵税四錢

海南九十九里の濱、松青く砂白きの中古碑を  
探ぐり、名城を訪ひ、夕陽低徊懐古の涙を濺ぐ感慨風流並びに其中  
に在り尚に近日出色の紀行文字とす  
風懐古を慕ふ士、青年文を學ぶの人、机上此一書を欠ぐべからず

青木義正君著

●土陽叢書 第八編 長曾我部元親 五月發行

●土佐古跡巡遊録 下卷 近刊

●土佐人物傳 中卷 近刊

●全 下卷 全

富田幸次郎君序文 武市佐市郎君著

●土佐近世商業史 全壹冊 全

寺石正路君著

●土佐四大地震記 全壹冊 全

全翁著

●高知市沿革史 全壹冊 全  
其他諸大家先生の編纂中あれば不日之を發表すべし請ふ諒せよ

# 出版豫告

松野尾章行翁著

## ●白灣往來

全壹冊 近刊

題して白灣往來と云ふ之れ九十九洋我土佐の謂あり、本書は松野尾章軒翁の著述する者、今般請ふて我土陽叢書に發行するの榮を蒙れり、其記する處尋常一般の記行文に異あり、我土佐の歴史を知り地理を案するの士は本書の出づるを待て知らるべし此段愛顧諸君に豫告す

開成舎本店主 片桐猪三郎

松村翠陽著

## ○土佐昔噺

逐次發行す

●土佐昔噺 第一編

●土佐昔噺 第二編

●土佐昔噺 第三編

●土佐昔噺 第四編

●土佐昔噺 第五編

●土佐昔噺 第一編

●土佐昔噺 第二編

●土佐昔噺 第三編

●土佐昔噺 第四編

●土佐昔噺 第五編

## 土佐國人名辭書

近刊

予は夙に我土佐の國諸名家の姓名が徒に草野の間に埋没燻滅し去りて人の知るものなきに至るを憂ひ開闢以來三千余年間土佐に關係ある土庶名工藝諸雜家に至る迄苟も有名なる人々は皆之を網羅せんと欲し既に「土佐國人名辭書」あるもの編輯に從事し明治二十六年以來業に已に六閱年諸名家の事蹟を蒐集せる事二千五百余名の上に出づ近年建碑の事非常に流行せり是實に美譽ありと雖も尙ほ弘く海内に知らしめ芳名を永遠に傳ふるに至つては之と青史に留むるに如かず然らば名家の祖先をして其功績と名譽とを發揚せしめ従つて追考の理にも當らんかしは依つて有名なる人の子孫知已たるものは其紀傳を各々に寄附せられたし就は快く之を該書中に收むべきなり豫て茲に記して各士に告ぐ

高知市北新町四丁目三番地

武市佐市郎

追白各士の便利によりて予又は開成舎本店へ寄附せられ度偏に奉希望候  
尙は各士の都合上もあはれ事あらん程に單に傳記に限らず第一の入り用は其人の主要なる事蹟と姓名は勿論の事通稱、字、号、諱、法名、住所時代年月日、死亡年月日、墓所父母兄弟姉妹師弟の關係、官位爵、職業、著作あれば書名、名作の品あれ



は品名、創始せし事あれば其事蹟、先づ大体是丈分明ければ宜しく候へ共分明ければ分明せし事迄にて充分なり其心して寄送あり度候其砌若し書冊より援萃せしん然れば其書目をば御記し被下度候左に今日迄蒐集せし目次をば記して参考に供せん然れ共單に是れに限るに非ず尙ほ他にあらば寄送被下度候也

（官職）國造。國守。國司。目代。介。權介。守。權。大目。直人。朝臣。據。權。據管。前司。按察使。判官代。探題。守護代。守護職。少領。女官等。將士。古城主。國士。守護。土居。領軍人。總士。以來國事難者。戊辰。歿。戰死者。西南。役。戰死者。征清。役。殉難者等。名家。四家。豪族。十二人。衆。七人。御先。一條。四家。老。泰。三。家。司。山。内。家。老。影。此。者。五。人。衆。本。井。田。五。人。衆。本。川。五。堂。榎。山。郷。七。宮。人。勘。王。堂。等。配。領。配。流。人。御。領。人。等。五。人。術。弓。劍。柔。鎗。寸。鎗。手。利。劍。鉄。砲。要。馬。車。目。等。文。藝。和。文。家。文。章。家。詩。家。和。哥。狂。歌。連。歌。俳。家。狂。句。テ。ニ。ハ。小。説。家。等。學。術。儒。家。漢。學。國。學。家。佛。學。禪。學。和。易。學。心。學。兵。學。禮。式。故。實。等。書。畫。書。家。洋。書。等。忠。考。節。義。孝。子。義。人。義。夫。義。婦。義。士。義。僕。按。民。貞。婦。節。婦。忠。士。忠。婢。忠。僕。賢。婦。順。民。復。讎。等。奇。人。奇。童。等。職。人。弓。工。金。工。刻。工。細。工。刀。工。大。工。鋸。工。鉄。工。陶。工。山。内。御。拒。職。人。甲。冑。師。等。技。術。銅。印。印。刻。鈕。等。技。藝。諸。山。長。唄。義。太。夫。女。義。太。夫。女。義。太。夫。女。義。太。夫。一。絃。琴。琴。笛。尺。八。其。石。抹。茶。插。花。鞠。能。弁。言。能。役。者。能。大。鼓。能。小。鼓。能。織。物。鑑。定。家。佛。優。相。撲。投。網。等。政。治。家。經。濟。家。商。業。家。銀。收。發。行。者。等。醫。師。陰。陽。師。等。神。佛。教。神。道。高。僧。取。薄。等。機。切。天。文。機。切。天。文。測。量。家。等。起。業。發。明。家。創。始。家。製。造。家。製。紙。家。航。海。家。等。

◎國民新聞 著者が土佐の舊事遺聞を尋ね風俗上歴史上の参考とあるべ

◎土佐遺聞録批評

◎日々新聞 土陽叢書第三冊にして高知片桐某の發行にす處土陽に於ける著名の事蹟人物傳を網羅し卷を追ふて上梓する由あり

◎大阪朝日新聞 土佐の國自慢ありされど史料の蒐集お志ある人は一讀すべきものあり

◎土陽新聞 本書は我土佐國の名處舊跡古事遺聞に關する歴史上の由來縁起をば趣味ある文章を以て叙述せるものあり讀書家一本を購ふて座右の珍をせば其益する處少あらざるべし著者は斯道お精通する寺石正路氏なり

◎日本新聞 土陽叢書中のもの土佐の舊事歴史等をつきつゝお記せるものあり、土佐に限らず一般の史料とあるもの多し

◎帝國文學 土陽叢書第三編として出てゐるものあり其緒言に云へる如く著者が自國の考ひ志料に供すべき良書好著の無きを憂ひて、其見聞せし所の舊事遺聞を蒐集しるものあり、近世輕浮の作多き世の中おは實著のものど云ふべし、以て其國の古跡風俗人物等の大畧を窺ふに足るべきか記事の殖燥に且りがちなるは事實の然らしむる處是非もなきとはいへ今少し何とかありたきものあり

◎讀賣新聞 土陽叢書の第三卷にして土佐の人物事跡の舊代記憶に存し



見ゆ、又釋忍性、釋天室等の僧侶の名もあり、孰れも皆經學文章に長し各々一氣概を備ふるの士なるが如し、斯る事業は其藩の歴史を究明する上に於て大に便益を與へるなるべく又藩内子弟の教育の爲めにも尠りぬ用を爲すべし吾人は事實の眞偽を知るに由なしと雖も此點に於ては著者の効を多しとする所なり、獨り望む斯る事業の益々各藩に起りて史學上其余光を及ぼすに至らんことを

### ◎關西の青年批評

由來土陽の地、魁奇傑の士に富む憾むらくは之を傳ふの正史なく其事蹟往々輝滅して世に顯れざるもの多し著者之を概して今此書を著はす、記する處簡ありと雖も能く其要を得、又た好著たるを失はざるあり

### ◎土陽新聞批評

土佐の地北翠嶺を負ひ南青洋に臨み秀氣清淑にして過去三百年間偉人傑士の輩出せし者亦尠あしとせす然れ共文献欠陥し正史の以て傳ふべきもの無く祖先鴻業偉跡も今は溼沒し去て識る者稀也是れ豈に本縣の爲悲むべきもの亦好古諸氏の遺憾とする所に非ずや本書は土佐遺聞録の著者寺石正路氏の著はす所おして紙數百有余頁古來偉人傑士記を輯るもの四十九人考証該博にして文字亦た簡潔あり以て祖先の偉業を知るべく以て我土歴史の好材料と爲すべし

### ◎高知日報批評

寺石氏が史に詳ししきは夙江湖の認むる所殊お其の精力を土佐の史に尽す所の勢洵に以て多しとするに足るものあり這回本書を公にするお當り氏は其の

自序お於て慷慨一番して曰く「嗚呼土佐國豈に何ぞ人物あからんや唯從來之を著す文章あきを恨むのみ」と以て氏が意氣を察すべきあり而して「一國の人物傳奇は一人の博奇を草するも異に勢ひ仔細に其詳細を述ぶる能はず其各個の文章粗大簡畧お過ぐる者やるは己むを得ざる」所をれば本書記する所の簡に過ぎ疎に失するを以て其の体裁を議するものあるは寧酷あるべし本書考證の說博にし記述の暢明あるは疑ふべからず若夫れ予輩が精細の批判評論は之を後に全完論了の際に期し茲には唯本書が古來土陽の人物を識らんとするも、好指折りたるを世人に紹介するに止めん序あからん發行者に一言す向後出版すべき續編には校正に一層嚴密なる注意をあすを忘るゝかからん事を望む

71  
329

# 出版豫告

神奈川丸事務長坂本喜久吉君著

日本叢書 第貳編 **歐洲再航録**

小形赤本全壹冊  
正價金拾五錢  
市外郵稅四錢

題して歐洲再航録と謂ふ是れ日本叢書第壹編 **雲海紀行の續編** あり  
本書が海事思想啓發の上に於て如何に裨益する處あるか請ふ發行の日を待て知れ  
此段青年諸君に急告す(五月三十日發行)

陸軍中將谷千城君題字  
佐々木甲象君著述

泉州 **烈舉實記**

菊判 全壹冊  
正價金廿六錢  
郵稅

土居盛義翁肖像

右は月中小發行す  
寺石正路君著

**人食考**

洋綴 全一冊  
正價金三十錢

右は目下東京に於て印刷中に付き五月十五日製本出來す

71  
329

